
チャビ！

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャビ！

【Nコード】

N8122Q

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

札幌きの不良が集まる光洋学園高校に入学した光一は、チャビというあだ名をつけられ、いじめの標的にされ、使いつ通りにされ、過酷な高校生活を送っていく。普通科のボス、杉田哲夫に服従させられる中、所属するバスケット部の岡田にも利用される。いずれ哲夫と岡田の衝突があるだろう。そのとき光一はどうするのだろうか。また、哲夫が所属する暴走族に、光一が無理やり参加させられる。気の弱い光一に無理難題が押し付けられる。

教師たちにも問題が発生する。担任の沢村は光一を助けようと奔

走するが、不倫相手の女教師、そして沢村を陥れようとするライバル教諭との確執が沢村の出世を阻もうとしていた。

高校生たちと暴走族の争い、教師とPTAのすれ違い。そんな中で、光一は傷だらけになりながら、学校を辞めず戦っていた。

その一

(一)

教室の自分の机にある弁当のふたを開けて、杉田哲夫は顔色を変えた。

焼肉弁当ではない。これは豚の生姜焼きじゃないか。

四時間目の授業が始まる前、哲夫は「俺、焼肉弁当」と、ボソツと言った覚えがある。それが違うものに聞こえたのかもしれないが、そこをちゃんと聞いて行動するのがこいつの仕事なのではないか。今までそう教えていたはずなのだが……。

「——チャビ、ちょっと来い」

哲夫が小さな声で言った。

役目を終えた中野光一は、買って来た昼食が間違いなかったかと、六人分の弁当やサンドイッチなどのチェックをしていた。一つでも間違えたら大変なことだ。

「おい、チャビ！」

今度は哲夫が大声で怒鳴ると、目の前にある机を蹴飛ばした。

「はい！ な……」

光一はすぐに駆け寄る。もう次の仕事だろうか。

「あれは何だ」

机と共に吹っ飛んでいった弁当を指差して、哲夫が訊いた。

「あの……生姜焼き弁——」

最後まで言い終わらないうちに、哲夫の蹴りが光一の腹をえぐった。

床にうずくまり、悶絶する光一の顔を、哲夫はスリッパで踏みつける。

「俺が食いたかったのは、焼肉弁当。——そう言わなかったか」

返事をしようにも、口元を強く踏まれて言葉が出ない。

どうやら間違って買って来たらしい。気をつけてはいるものの、いつも何か間違ってしまうのだ。そしてその度、ご褒美と称したいじめ、制裁が光一に襲い掛かった。

「す……すみません……すぐ取り替えて……」

同じクラスの同級生だが、敬語を使って話さなければならない。

「早く行って来い。腹が減って死にそうだ」

フラフラと立ち上がった光一は、慌てて教室を出て行った。

——学校を抜け出すのはもちろん校則に違反しているが、杉田哲夫に命令されたら、近くのコンビニに買いに行かなくてはならない。最初はビクビクものだったが、最近は校舎裏の抜け道を見つけている。買いに行くのは簡単だが、二度目となると、先生に見つかる恐れもある。どうしよう……。

絶対服従を強要され、奴隷以下の扱いをされる。そして、使いつ走りのご褒美が殴る蹴るの暴力だからたまったものではない。

しかし行かなければ、その後どうなるか……。

光一の身体にできた無数の傷がその足を速めていた。

——チャビと呼ばれている中野光一に対するいじめが始まったのは、この春、この光洋学園高校に入学して間もない頃だ。

体が小さい光一は、「チビ」と親しみを込めて呼ばれていたのだが、気が弱く、頼まれ事を断れないため、不良たちからしだいに使われるようになるにつれ、呼び名も「チャビ」に変わって行った。

この高校は、この町では有名な不良生徒のたまり場の学校である。学力は中程度で、体育会系の部活に力を入れているところだ。普通科、商業科、体育科で構成され、光一が所属する普通科は四クラスある。その一年A組のボス的存在が杉田哲夫なのだ。

入学と同時に勢力争いが繰り広げられる。目が合えばケンカ、目立つ行動を取れば、放課後、体育館裏へ呼び出され、殴る蹴るの暴行を受ける。そうやって行くうちに、いくつかの不良グループが形

成され、力の差でランクが決まって来ていたのである。

学校の中にちょっとした学食があり、パンや弁当なども販売されているが、充分な量はない。四時間目の授業が終わると同時に走っていないければ、すぐ売切れてしまうのだ。その弁当を買いに行くため、誰か一人代表を決めようということになった。その最初の役目が、光一だったのである。

「俺の分も一緒に買って来てくれる？」

初めはそういう軽い言葉からだった。

「うん、いいよ」

光一は気軽にこたえていた。まさかそれがエスカレートするなどと思っていなかったからだ。

何日か続いたある日、光一は自分が使いつ走りになりつつある事に気づく。そして、断ることにした。しかし……。

「チャビ、パン買って来い」

杉田哲夫が、言った。

光一は黙っていた。返事をせず、自分の席で持参した弁当を広げようとしていた。

次の瞬間、光一は胸倉をつかまれ、哲夫の顔を間近で見ることになった。

「――チャビ、パン買って来い」

哲夫は同じ言葉を繰り返した。

逆らえばどうなるか、そのギラついた目が、光一を震え上がらせていた。

それから、光一の惨憺たる高校生活が始まったのである。

もちろん教師に密告する者もいたが、今ではそんな奴はいない。その後どうなるか、血みどろになって学校を辞めていった何人かの生徒を見れば、教師の前で口を開くことなどできないのだった……。

「チャビ――ほれ」

哲夫は椅子に座ったまま机の上に足を乗せた。光一は近寄って、

その足をさすり始める。寒くて足が冷たい時は、いつもこうやって暖めてあげなければいけなかった。

「チャビ。まさか学校を辞めようなんてこと考えてないだろうな」

「まさか……」

「俺から逃げようと思っても無駄だぞ。この町に住んでいる以上、お前は俺の親友だ」

親友……。

「分かってます。逃げるなんて、そんなこと……」

「俺に逆らったらどうなるか、分かってるよな」

命令に従っても《ご褒美》が待っている。どっちにしても同じことじゃないか……。

光一は心の中で呟いていた。

「そっちが終わったら、俺も頼むぞ。手抜きすんなよ」

哲夫の手下、村上勇一が光一の横に来て言った。哲夫ほど頭は良くないが、腕力にかけては異常なほど自信を持っている。腕力というより暴力にかけては、と言った方がいいだろう。

「分かりました。すぐに行きます」

「おい、勇一。そんなに無理を言うな。チャビも大変なんだぞ」

哲夫が嗤いながら言った。

「ごめん、分かってる。もちろん哲夫君が終わってからだよ。はは……」

哲夫に逆らったら大変なことだ。勇一は自分の机に戻ると、食べかけのコンビニの弁当に再び箸を運んだ。もちろん光一に買いに行かせた弁当である。

四十五分の昼休みも半分ほど過ぎて、教室の中には哲夫とその手下が五、六人、そして光一が残っているだけで、他の生徒たちは誰もいない。光一への暴力のとぼっちを受けたくない。いや、光一への暴行自体から目を逸らしたのである。

——校舎の三階にある教室の窓枠に座らされた光一に、ジャックナイフを磨いている哲夫が親しみを込めて問いかけた。

「今日の放課後はどうするのか、チャビ君。俺、ゲーセンに呼ばれてるんだよ、先輩たちに。手ぶらじゃ行けないし、せめて先輩たちの身の回りの世話だけでもしてあげたいと思ってるんだ」

学校の先輩ではない。哲夫が所属している暴走族の兄貴分のことだ。

「それが……。今日の部活はどうしても抜けられません。明日からの交流試合のために、メンバーのユニフォームを洗濯しないと……」
今にも落下しそうな身体、そして震える足を押さえながら光一は言った。

哲夫がいきなり蹴飛ばした椅子が光一の足下で弾け飛んで、危うく落ちそうになる。その身体を勇一が食い止めた。

「そうか、君はバスケット部の小間使いをしていたんだよね。忘れてたよ。でも、バスケット部の岡田浩二と俺とでは、どっちが君に優しくしてるかな」

「それはもちろん、哲夫さんにはお世話になっています。でも……」
どっちにしても同じである事は、光一にしか分からないかもしれない。光一に対するいじめは、クラス内から始まって、隣のクラス、普通科全体、そして学校中に広まろうとしているのである。今となつては、バスケット部員や先輩たちまでもが、光一を格好の餌食としているのであった。

「なあチャビ。そろそろ商業科の岡田と決着をつけないければならな
いと思ってる。最近あいつ、調子に乗りすぎだろ」

指を鳴らしながら、哲夫は言った。「お前、その時、どうする……」

「それは……」

「――ま、いいや。今日はチャビと一緒にいっても邪魔になるだけ
だろ。安心してバスケット部のオモチャにしてもいいな」

そう言いながら近づいて来た哲夫は、光一を窓から突き落とす振
りをして、逆に教室の中に引き込んだ。

そして、硬く握られた拳が、光一の腹に埋め込まれていた……。

その二

体育館の裏にプレハブの大きな小屋がある。体育系の部室が集合している建物だ。

その中のバスケット部の部室で、光一は一人、ユニフォームの洗濯をしていた。

手を休めて考え事をしていると、突然ドアをノックする音が聞こえた。光一はギクリとして立ち上がる。

「は、はい！」

そっとドアが開いて、男が顔をのぞかせた。

「あれ、一人か？ 他のメンバーは？」

「何だ、びっくりさせるなよ。みんなは体育館で練習してるよ。明日の試合は負けられないからな。今まで散々やられてるし、そろそろ見返してやらないと県大会も危ないんだ」

光一の唯一と言っていい友達の上村亮二だった。もちろん誰も知らない。バレたら光一の二の舞だ。亮二もそれを怖がっていたし、光一も巻き込むことはしなかった。

「お前は練習に行かなくてもいいのか。もちろん立場は分かるけど……」

「俺が洗濯しなかったら、どうなるか分かってるだろ。こうやって一人でいるときに、一番平和なんだ、俺……」

光一は苦笑いして、アイロンのスイッチを入れた。

「それより明日、公休なんだろ。バスケの試合が終わったら、ゆっくり休めるじゃないか」

「どっちにしても同じだよ、あいつがいるんだから。杉田哲夫と岡田浩二……。俺が休めるところなんて全くないんだよ、この町じゃ」

こんな話を人が聞いたら驚くだろう。光一の愚痴は、この亮二にだけしか話したことがなかった。

「思い切って学校辞めたらどうだ。まだ二年以上もあるんだぞ。お前、耐えられるのか」

「たったの二年じゃないか。たったの……」

自分に言い聞かせるように、光一は小さく呟いていた。

外から足音が聞こえてきて、バスケット部に近づいて来る。光一の合図で亮二が慌ててロッカーの裏に隠れたとき、勢いよくドアが開いた。

「チャビ！　そろそろ練習終わりだ。体育館に行って片付けて来い」
メンバーの向井健吾が言った。「それから昨日、ボールの整理し
てなかっただろう。岡田君、怒ってたぞ。俺は知らねえからな」

「だって、キャプテンがそのままでもいいって言ったんだ。だから僕
……」

「言い訳するな！　とにかく岡田君が呼んでるから、早く行って謝
つてきな」

力任せに投げつけられたボールが、光一の顔で方向を変えた。弾
んだボールは亮二の足下でバウンドしている。亮二はただ足を震わ
せているだけだ。

「でも、まだ洗濯が終わってないし、キャプテンが……」

「どっちにしても同じだぞ。岡田君は虫の居所が悪いんだよ。なぜ
だか分かるだろ。明日の試合は負けられないし、それ以上に気にな
ってるのは、あの杉田哲夫だ。お前が杉田にいいように使われてる
のが気に入らないんだよ」

光一は返す言葉もなく、メンバーのユニフォームにアイロンをか
け始めた。

この向井も岡田のグルだ。下手なことを言うとか岡田に筒抜けにな
るし、どうせ練習が終わると、上手くシュートできなかった鬱憤を、
光一の体に発散させられるのは分かっていることだった。

何も言わない方がいい。

「とにかく、すぐ体育館に行け！　早くしないと二十発が三十発に
なるんだぞ。何なら殴られる練習でもしていくか」

向井がそう言って、指を鳴らしながら近づいて来た。

「わ、分かりました。分かったからやめてください」

いつもの癖で、両手で頭を庇いながら光一は言った。しかし激痛が走ったのは、頭ではなく太ももだった。

向井は気にすることもなく、部室から出て行った。

しばらく立てないまま足に感覚が戻るのを待っていた光一に、ロツカーの裏から出て来た亮二が申し訳なさそうに声をかけた。

「ごめんな、助けてやれなくて……」

「いいよ、いつもの事だから。これくらい慣れてくれば痛くないもんさ。それより俺、行かなくちゃ。——亮二は早く帰った方がいい。早くしないとメンバーがここに帰って来る。見つかったら大変だ」

光一はそう言って歩き始めた。

亮二は光一が足を引きずりながら歩いている姿を見ても、かける言葉もなく、ただ同情する気持ちを抑えて見ている事しかできなかった。

体育館の中から、ボールが跳ねる音が聞こえている。最後のシュートの打ち込みらしい。

出入り口から入った光一は、コートに一礼し、メンバーが集まったベンチへと駆け寄った。

「洗濯は終わったのか。いつまでやってんだ。もう練習は終わりだぞ。ボールを片付けたら、床を磨いて来い」

ベンチに座ったままメンバーの動きをチェックしていたキャプテンの迫田洋二が、光一の方を振り向きもせず冷たく言い捨てた。

「分かりました」

「あ、それから——」

走り出そうとした光一を、キャプテンが呼び止めた。

「はい、何か……」

「最近、岡田の様子がおかしいんだ。動きが緩慢になっているし、ボールへの反応が鈍い。何か考え事でもしているのか……。お前、

何か知らないか。岡田の悩みとか、問題事とか」

「さあ、僕にはちよつと……」

おそらく杉田哲夫の動向が気になっているのだろうが、光一からそのことは言えない。

「まあいい。何か分かったら教えてくれ。場合によってはスタメン落ちだ」

と、迫田洋二が言った。「分かるだろ、俺も高校生活最後の年だ。明日の試合、そして県大会はどうしても勝ちたい」

光一は何も返事することができず、キャプテンに一礼して、体育館の中に散らばったボールを拾い始めた。

その後ろ姿を突き刺すような視線を光一は感じている。もちろん岡田の眼差しだ。どうせ練習が終われば、岡田のかばん持ちをしなからチクチクやられることは分かっているのだから、何もここで機嫌を取る必要はない。ただ黙々とボールを集めていればいい。

練習終了の挨拶を告げた円陣が散らばって、メンバーは次々と体育館から出て行った。

光一は倉庫からモップを取り出し、一直線に床を磨き始める。そして、最後まで残っていた岡田が近づいて来る。――ほら、来たぞ！

「チャビ……」

いきなり怒鳴りつけられると思っていた光一は、元氣のない岡田の声に戸惑った。

「――どうしたんですか。僕が昨日、ボールの整理をしてなかったから……」

「明日の試合が大事だということは分かってる。もちろん県大会もな。キャプテンにはいい思い出を作ってあげたいと思ってるんだ。しかし、どうしても気になることがある」

岡田は光一の顔を見て、「お前は誰の子分だ。俺か、それとも杉田か……」

と、言い淀んだ。体育館の中では、岡田がバウンドしているボールの音だけが響いている。

「誰の、と言われても、僕は……」

「まあいい。――それより、村上勇一というのは、杉田の手下か？先週、俺のクラスの奴が村上にやられたんだよ。しかも不意打ちだ。その時に俺の名前が出たそうさ。チャビを使うな、チャビは杉田の子分だと捨て台詞を吐いていったらしい」

弾んでいたボールを両手で受け止めて、岡田は光一の方に向き直った。

「あまり気にしない方が……」

「チャビのことだけじゃない。あいつはこの学校全体を締めようとしているんだ。そのうち俺たちの商業科まで、杉田の触手が伸びて来るはずだ。その前に手を打たなければならない。――いいかチャビ、動きがあったらすぐ知らせろ。裏切りは禁物だ。分かってるよな」

「は、はい……」

鋭い目つきで睨まれた光一は、条件反射的に歯を食いしばった。

いつものようにストレス解消のパンチが飛んで来ると思ったからだ。

「何やってんだよ。また殴られるとでも思ったのか」

トントンと音がして薄目を開けてみると、岡田はボールをバウンドさせて、離れたゴールポストに向かって投げた。ザクツと音がして、見事にネットに吸い込まれる。

岡田はニヤリと笑って光一に近づいた。

「実はお前に、やってもらいたいことがある。チャビにしか出来ないことだ。これは命令じゃない。俺からのお願いだ。ちょっと耳を貸せ……」

誰もいない体育館なのに、岡田は小声で耳打ちすると、光一の肩を軽く叩いて体育館を後にした。

一人残された光一は、震える足で、ただ夢中に床を磨き続けた。

――何かが動き始めている。だがどっちに転んでも自分の成れの果ては分かっていた。だからといって、何も行動できない自分自身にも、光一は情けなさを感じていたのである。

その三

(一)

金曜日の放課後、一年生の担任教師が職員室に集まって、生徒たちの生活態度についての職員会議が行われていた。

この光洋学園高校、見かけ上はまじめな生徒たちで埋め尽くされた進学校なのだが、最近、高校生の裏での非行行為が盛んである事が取りざたされていたのである。

学年主任の池田憲次が、各担任から提出された生徒たちの現況報告を見ながら、なにやらブツブツと呟いていた。

「さて、何が問題なんですか……。全体の成績は上がっているし、停学になるような非行を犯した生徒はいませんね。クラブ活動は盛んだし、野球部は県大会優勝。テニス部も柔道部も、そこその成績を上げている。しかもあのバスケット部が県大会の決勝まで行っているそうじゃないですか。この会議は必要ないような気がしますかね」

池田はそう言って、深く溜息をつきながら、つけたばかりのタバコを灰皿に押し付けた。

「待ってください。子供たちというのは、大人には分からない世界を作っているものです。先生も子供の頃そうじゃなかったですか。親や先生たちに分からないように悪戯をしたことがあるでしょう。現在ではメディアやインターネットの影響もあって、悪戯どころか犯罪に近い非行を繰り返している生徒もいるはずです」

光一の担任である沢村俊雄が、主任の池田に詰め寄った。

髪型や服装の乱れだけではなく、見た目だけでは分からない生徒たちの学校外での行動を追及しようと、沢村が呼びかけた職員会議だったのである。

「私は別に問題ないと思いますが……。ただ、弱者と強者の隔たり

が出来てきたのは分かります。でもこれは、弱い立場の生徒がどこまで自立できるか、私たちに与えられた職務だと思ってますがね……」

商業科A組の担任、堂村誠次が発言した。

「それはどうかしら。強い弱い生徒たち個人の問題ですし、もちろん性格の違いで様々なグループが出来てもおかしくはありません。むしろ、弱者と言われている生徒たちの方がおかしいのではないのでしょうか」

普通科B組の担任、園田洋子が、機嫌が悪いのか、ぶっきらぼうに言った。学年全体の中で、洋子が担当している国語の成績だけが著しく低下していたのである。もちろん自分のせいだとは思っていない。教師生活八年目、三十歳を少し過ぎたばかりの独身女教師は、こんな会議があると、自分だけが責められそうで面白くなかったのだ。

「さて、沢村先生が言うような子供たちの非行があるとすれば、どのようなことをしているのか具体的な例を挙げていただきたい。第三者からの情報といっても、証拠がない未確認なものばかりじゃないですか」

主任の池田が、沢村に視線を移してから言った。

「確認は出来ていないにしても、酒タバコ、万引きや恐喝、不純異性交遊など、例を挙げればきりがありません。それに、いじめの問題は重要な課題だと思います」

「沢村先生は、この光洋学園にいじめが存在すると言うのですか」

「その通りです。うちのクラスの中野光一がいじめられています。以前、他の生徒が知らせて来たことがあります。陰湿ないじめに遭っているようなんです。まだ確認は取れていませんが……」

沢村はそう発言したが、この場の雰囲気は自分を受け入れようとしていないことを感じていた。

自分の授業が進めばいい、学校内でまじめにしてくれればいい、学校の運営が成り立てばそれでいいんだ、といった考えが、職員室

の中で蔓延していたのである。

「そんなことよりも、生徒たちではなく、先生方の方に問題があるんじゃないですか。最近、何やらよからぬ噂を耳にしますがね……」

池田がメガネの奥から、園田洋子をジロツと見た。メガネをズリ下げて見られるのは、あまり気持ちのいいものではない。その奥にある人間のいやみが見えるような気がするからだ。

洋子は何も答えず、ただ書類に目を通していた。

「よからぬ噂とは、どのようなことですか？」

堂村が池田に訊いた。

「あくまでも噂ですから、私も信用しているわけではありません。ただ、先生方のプライベートに関わることでですから、この件を議題にするのはやめた方がよさそうですね」

池田はそう言って、再び報告書に視線を移した。「さて、何でしたっけ……」

結局、一時間もの時間が費やされた会議は、何も結論が出ないまま終了していた。

帰路に就く先生、クラブの顧問に赴く先生。職員室に残った沢村は、自分の机に向かって、集められた報告書の詳細を見直していた。

「――まだ帰らないんですか。何もそこまで思い詰める必要はないと思うわ。生徒たちだって、そんなに悪い子なんていないわよ」

園田洋子が、沢村の肩を叩いてそう言った。職員室に残っているのは、いつの間にかこの二人だけになっていた。

「まだいたのか。早く帰った方がいい。また変な噂が立ってしまう。どこから見られてるか分からないんだから、学校内では気をつけないと危ないよ。俺たちの関係がバレたら、即刻クビだ」

「大丈夫よ、誰もいないんだから。それより噂って、やっぱり私たちのことよね。池田先生、私を見てたわ」

「まさか、今まで誰にも見られたことないんだから」

そう言った沢村は、辺りを見回して、机の書類をカバンにつめ始

めた。

「そんなに怖がらなくてもいいじゃない。私は平気よ。たとえクビになっても、使ってくれる学校なんてどこにだってあるわ。――でも、あなたは無理よね。奥さんや子供がいるし、五十に近いおじさん先生を雇ってくれる学校なんて、さらにはないわよね。クラブの顧問をしているわけじゃないし、それに――」

「やめろ！ 俺をバカにしてるのか。最初に誘ったのは君なんだぞ。それに、お互いの立場を尊重して、職場や家庭を壊さないと約束したはずだ。君は独身だからいいかもしれない。しかし俺はね……」
そこまで一気にまくし立てた沢村の言葉を、洋子が唇に当てた指が止めた。そして、しばらくの沈黙のあと、誰かが廊下を歩いていく足音が聞こえて、沢村は椅子に座った。

「今大事なことは、生徒たちの成績の向上よ。そのために私たちは努力してるんだから。いじめの問題もあるけど、いじめられる方ももう少し鍛えないといけないと思うの。強い人間を見るとビビって近づけないなんて、全く情けないばかりだわ」

憤然として洋子が言った。

「教科書に載っていることを教えるだけが、教育じゃない。勉強も大事だけど、未熟な子供たちの人間形成の方が先決だ」

「そんなこと言うけど、この学校にいじめなんてあり得ないわ」

「君が知らないだけだ」

「現場を見たわけじゃないんでしょ。それに、中野光一に聞いたの、いじめられてること」

「訊いても答えるはずがない。見返りが怖いからな。しかし中野の目を見れば分かる。周りを気にしながらいつも緊張しているし、助けを求める心の叫びが満面に現われてるじゃないか。俺は助けてあげたいんだよ」

そう言いながら沢村は立ち上がってカバンを取り上げると、ゆっくりと歩き出した。

「待ってよ、帰るの？ 今日是一緒にいてくれるんじゃないの」

「悪いけど、そんな気分じゃないんだ。それに、改めて君に話したいことがある」

振り返った沢村の顔がこわばっている。

「何よ。そんなに怖い顔しなくていいじゃない。——待って」

その時、ノックする音が聞こえて職員室のドアが開くと、一年生のひよろつとした気の弱そうな生徒が、申し訳なさそうに中をのぞいていた。ガタガタと震えているのは、外の寒さのせいだけではなさそうだ。猛獣に追われた小動物が窮地に追い込まれた時のような、悲壮感すら漂う表情で何かを求めているようだった。

「沢村先生！ まだいてくれたんですね。よかった……」

よろめくように近づいて来たその生徒は、洋子の存在など視野に入っていないのか、沢村の懷に飛び込んで来た。

「どうしたんだ、岡野。何があったんだ……」

岡野翔太は、沢村の背後に隠れるように回り込んだ。そしてその場にうずくまると、しゃくり上げるように泣き出した。沢村が担任をしているクラス、もちろん光一と同じ教室で学んでいる、おとなしい生徒だ。

「た……助けてください！ 僕、殺されます……」

「だからどうしたんだと訊いてるんだ。誰かにいじめられたのか」

岡野を抱き上げながら、沢村は訊いた。

「実は今、教室で……」

岡野は泣きながら言った。「教室に残って、美術部に提出する絵の仕上げをしていたんです。出来上がった作品を見直していたら、あいつらが入って来て——あいつらが……！」

岡野の目がカッと見開いて、訴えようとしていた言葉が喉元で押しつぶされた。その目は職員室の出入り口を凝視して、痙攣でも起こしたように、身体全体を震わせていた。

「どうしたんだ、岡野！」

振り返ってみたが、沢村の視界にはいつもと同じ風景でしかない規則的に並べられた机、無意味なプリントが貼付された掲示板、そ

して、誰もいない出入り口のドアと窓しか目に入らなかった。

「言ってみろ！ 誰かいたのか？」

「ご、ごめんなさい、何でもありません。――僕、帰ります。お願いですから、何もなかったことにして下さい」

そう言った岡野は、涙を拭きながら職員室を出て行った。廊下に出た後は、得体の知れない魔物から逃げるように、一目散に走って行ったのだった。

出入り口から嗤うように見ていた目。そして、その後の岡野の惨状など、教師たちには知る由もなかった。

もちろん岡野の痛切な悲鳴は、成績だけで生徒を判断するサラリーマン教師に囲まれた沢村には、聞こえるはずもなかった。

その四

「おはようございます!」

毎朝教室で行われる朝礼の風景である。生徒たちは立ち上がって一礼した。

「おはよう」

担任の沢村も挨拶して、普通科A組の名簿を教壇の机に広げた。クラス委員の着席の号令の下、くだらなさと生徒たちが座り始める。子供に限らず、社会人になっても朝の八時半という時間は、まださつきまで見ていた夢に未練を残しているものだ。

「おいおい、しっかりしろよ。二学期ももうすぐ終わりだ。気合を入れる。みんな揃ってるか」

沢村はゆっくりと教室内を見回した。「いない奴は手を挙げろ」
「そんな無茶言わないで下さいよ。幽霊に手を挙げろって言うんですか」

元気のいい生徒が笑いながら言った。

「よし、みんないるようだな。それでは今日の予定を――」

「待ってください先生。岡野がまだ来てません。あいつ、今まで遅刻したことなかったのに……」

教室の中が少しだけざわついたが、それと同時に異様な雰囲気が漂い出したのを、沢村は見逃さなかった。

普通科A組は男子生徒ばかりのクラスで、C組D組にだけ女子生徒が在籍している。色気のない男ばかりの集団は、見栄も好色も何もない、男臭い箱の中にあるようなものだ。

さまざまな視線が飛び交っている中を、沢村は神経を尖らせて、一人ひとりの動向に注目していた。

「岡野は今日から学校には来ない。昨日、岡野の両親が来て、学校を辞めさせてくれと言って来た。本人がそう望んでいるらしい」

「あいつ辞めたんですか？　学校に来るの、楽しみにしてたのに……」

岡野と仲の良かった生徒が、突然の知らせに驚いていた。

「岡野は大ケガをしているそうだ。誰かに暴行を加えられて現在入院しているんだが、誰にやられたのか、何も言わん。おそらく見返りが怖くて我慢しているだけとは思うんだが……」

教室の中が静まり返った。「最近の岡野の行動を知っている奴はいないか。何でもいい、知っていたら教えてくれ」

沢村は懇願するように生徒たちを見回した。いじめが存在するとは感じていたが、標的になっているのは中野光一だけだと思っていたのである。もちろんいじめる方も、このクラスにいるはずだと目論んでいた。

生徒たちは凍りついたように動かない。それどころか沢村と目を合わせようとすることもなかった。

「他のクラスか、どこか違う学校の仕業じゃないんですか。俺たちにそんな怖いこと出来るわけじゃないじゃないですか」

村上勇一が、眠い目を擦りながら元氣のない声で言った。

「いや、別にお前たちを疑ってるんじゃない。ただ、この学校の中に弱い者を脅かすグループがあると思っている。いわゆるいじめだ。そのいじめの有無を俺は知りたいんだ」

「いじめなんかないですよ。先生も知って入る通り、みんな仲良いでしょう。いじめどころか喧嘩もしないんですから。岡野が怪我したって言うけど、あいつドジだから自転車からこけたんじゃないんですか」

杉田哲夫の手下、？木典雄が笑いながら言った。――この男、哲夫グループの軍師のような役割をしているしたたかな男だ。

「中野、お前はどうか。何か知らないか」

沢村は、顔を伏せたままの光一に矛先を向けた。もちろん、言葉が返ってくるとは思っていなかったのだが……。

光一は少しためらってから言った。

「岡野君のことは僕には分からないけど、この学校にいじめる人なんていません。みんな優しい人たちばかりです」

沢村は何も言わず、光一を見ていた。真剣な眼差しで沢村に視線を送っている光一だが、明らかに何かに怯えていることは沢村にも分かっていてた。ただ、光一を操るロープがどこから伸びているのか、それを探りたかったのである。

「ほらね、チャビ君も言ってるじゃないですか。そんな奴がいたら、俺たちがぶっ飛ばしてやりますよ。いじめなんて卑劣なことを……」
と、勇一が言った。

「そのチャビという言い方も、良いもんじゃないな。あだ名で呼ぶのも一つのいじめにつながると思わないか」

沢村は勇一だけではなく、クラスの生徒たち全員に問いかけた。
今やこのクラスだけではなく、学校中の生徒からも本名で呼ばれることは少なくなっている。時には教師の中にもあだ名を呼称する者もいた。

「そんなことはありませんよ。親しみを込めたニックネームじゃないですか。チャビだって喜んでますよ。な、チャビ！」

隣の席に座っている典雄が、光一の顔をのぞきながら言った。光一の背中に、勇一が手に持っているコンパスの針がチクリと刺さったが、沢村は何も気がついていない。

「僕はチャビって呼ばれた方が嬉しいですよ。みんな仲良くしてくれろし……。僕のことは気にしないで下さい」

「もしかしたら、商業科の奴らじゃないかな。ほら、最近バスケット部の岡田浩二が良く来てたじゃないか、こっちの校舎に。何となく怪しいと思ってたんだよ。な、チャビ」

と、典雄が同意を求めた。

「う、うん……」

背中が針が、光一に返事をさせる。

「よし、分かった。何か知ってる奴がいたら、あとで職員室まで来てくれ」

と、沢村は言ってから、「そろそろ起きた方がいいんじゃないか、そこで眠ってる奴。授業開始の時間だぞ」

座ったまま目を閉じている生徒にチョークを投げつけた。沢村のいつもの懲罰だ。しかしその生徒は、素早い動作でそれをかわした。「ちゃんと起きてますよ。あまりにも馬鹿げた話なんで、期末テストの計画を立てていたんですよ。目を閉じたままのイメージトレーニング、勉強にも活用できるんですね。初めて知りました」

杉田哲夫はそう言って立ち上がった。「早く授業を始めてください。明日からの試験に間に合いません」

沢村は何も言わなかった。確かに杉田の成績はクラスのトップだし、授業を急ぐのも分からないではない。

しかしこの時、沢村は何かを見たような気がした。いや、何かを感じていたのである。

その五

(三)

「誰がやったんだ……。俺は何も聞いてないぞ！」

一時間目の沢村が務める日本史の授業の後、休み時間となったA組の教室の中は、今までにない陰悪な空気が漂っていた。

「やったのは俺と典雄なんだけど……。だってあいつ俺の言うことに逆らって、チャビの事もバラしてやる、って言いながら暴れ出したんだ」

村上勇一はそう言いながら、？木典雄の腕を引っ張った。

「そうなんだよ。岡野の野郎、二、三発ぶん殴ったら職員室に向かって走り出しゃがって……。追いかけたんだけど、間に合わな——！」

杉田哲夫の足が、典雄の腹にめり込んだ。とっさに勇一も身をかわす。

他の生徒たちは教室を出て行っただけで、何事も起きていないような顔で無関心を装っていた。

「たかが岡野じゃないか。お前らそんな雑魚を相手にして嬉しいのか」

「だって、パシリはチャビだけじゃ間に合わなくて……。岡野なんか適役じゃないか。だから少しずつ調教しようと思ってたんだ。そしてたらあいつ……」

勇一はそう言いながら震えている。どうやら哲夫は本気で怒っているらしい。

「弱いからといって侮るな。弱い奴ほど、窮地に立ったときの爆発力は凄まじいものがあるんだ」

「でも、チャビだって……」

「あいつは弱いわけじゃない。力だってあるし、本気で喧嘩したら

お前らだって勝てるかどうか分からないんだぞ」

哲夫の話は、いつものような威圧するような口調ではない。何となく自分に言い聞かせるような含みがあった。

「まさか、そんな……」

「——あいつは中途半端なだけだ。ビクビクしてるだけで、自分の意思を押し殺しているから何でもいやとは言えない。だから、いじめられても、使われても、ただ我慢して時が経つのを待つしかないんだ」

哲夫は教室の隅にいる光一に視線を送った。「でも、あいつは違う。岡野は本物の弱虫だ」

朝礼の沢村の話は、哲夫にとって寝耳に水だった。光一のことだったらそれなりに対処できるが、自分が知らない間の出来事が、哲夫の思考を鈍くさせていた。

「——まあ、いい。岡野もいなくなったんだ。後はあいつが病院で喋らないように、お前らがしっかり見張っとくんだな。任せたぞ」

哲夫はそう吐き捨てて、教室のドアを力任せに開けた。哲夫の大きな声と共に、廊下に出ていた生徒たちが一瞬にして静まり返った。「お前らも分かってるだろうな。岡野みたいになりたくないだろう。妙なことは考えるな。たとえ俺がいなくても、あいつらがいるんだ」

哲夫は教室の中をあごでしゃくりながら、怯えている生徒たちに言った。

しかし誰も返事はしない。ただ何も言わず下を向いたまま、哲夫と目が合うことを恐れていたのである。

教室の中がざわついている。

哲夫が振り向くと、典雄が廊下の窓から顔を出した。

「哲夫君、ちょっと来てくれ」

「どうした、何かあったのか」

教室に入った哲夫は、窓から校庭を見下ろしている仲間たちに近づいた。

「ほら、あいつだよ。バスケ部の岡田。こっちを見て嗤ってやがるんだ」

勇一が苦々しげに言った。

哲夫が窓の外を見下ろすと、岡田が数人の仲間たちと共に、腕を組んで、嘲笑うようにこっちを見上げている。

「何か企んでいるんじゃないのかな。あの野郎、ふざけやがって」
典雄がそう言って、校庭につばを吐き捨てた。

「――チャビ、ちょっと来い」

哲夫に呼びつけられた光一の手から、数冊の教科書がこぼれ落ちた。二時間目に使う教科書を、いつも持ってこない勇一たちのために、隣のクラスから借りて来たものである。

「は、はい！」

光一は慌てて拾い始めたが、

「そんな物はどうでもいい。こっちに来てみる」

「な、何か……」

近づいて来た光一の胸倉を？んだ哲夫は、その身体を窓枠から押し出そうとした。

「あの岡田の態度は何だ。俺を挑発してるのか」

と、哲夫は顔を近づけて言った。「お前が知らないはずがない。言ってみろ！」

「待ってください！　ぼ、僕は何も知りません。本当です！」

「最近お前は岡田の言いなりになっているそうだな。俺を裏切るつもりか」

「そんな、そんなことはありません」

「だったらここで岡田の悪口を言ってみろ。あいつに聞こえるような大きな声で言え。バスケ部が決勝で負けたのは、岡田がデブで、のろまのせいだ、と言ってみろ」

襟首を？まれた光一の頭が窓から飛び出して、岡田と視線が合った。しかし光一の口からは何も言葉が出なかった。

岡田は嗤っている。それだけではない、声を出して高笑いを始め

ただ。

光一の体が震え出した。高い所から落ちる、という恐怖感からではなかった。

光一だけにしか分からない、岡田に頼まれたあのこと。それが哲夫にバレた時の映像が、光一の脳裡に鮮明に浮かんでいたからである。

突然身体を引き込まれて、光一は教室の床に投げ飛ばされた。

「やっぱりそうか。――チャビ、後でたっぷりお説教だ。お前もい度胸して来たぜ……」

哲夫はそう言い捨てて、再び窓の外を睨んだが、岡田は笑いながら自分の教室へと帰り始めていた。

「さあ、どういふことか聞かせてもらおうか、チャビちゃん」

典雄の声を合図に、光一は数人の男たちに囲まれていた。

「――何してるの、あなたたち！ 授業が始まる時間でしょ。早く席に着きなさい」

二時間目の国語の教諭、園田洋子が、教室に入って怒鳴った。いつの間にかチャイムが鳴っていたらしい。それほどまでに動揺していたのだろうか、哲夫は自分の不甲斐なさを悔やんでいた。

「すみません、園田先生。僕たちあまりにも仲が良いもんでね、始業のチャイムに気がつきませんでした」

と、哲夫が言った。

「遊んでる場合じゃないでしょ。明日の試験、大丈夫なの？ さあ、座った座った」

と、洋子は語気を強めて言った。「おい、チャビ、何泣いてんだよ。お前、男だろ。しっかりしろよ！」

床に座り込んだまま、薄っすらと涙を浮かべている光一に気がついて、洋子は優しくない口調で言った。洋子は生徒を説教するとき、なぜか男口調になる癖がある。

「何でもありません。気にしないで下さい」

「誰かにいじめられたのか？ 制服、真っ白じゃないか」

「違います。自分で転んで……」

「お前もドジなやつだな。——誰かいじめた奴がいるんじゃないの。正直に言いなさい！」

他の生徒たちに向かって、洋子はそう叫んだ。

「本当です。僕、自分で転びました！」

そう言った光一は、哲夫たちが何事もないような顔で自分たちの席に座っている姿を見ながら、屈辱な思いを噛み締めていた。

「ま、どっちにしても、お前がしっかりしなきゃダメなんだよ。いじめる奴がいたら、逆に殴り返してやりなさい。そうやってメソメソしてるからいじめられるんだよ。分かったか！」

洋子の一喝で、教室の中にクスクスという笑いが漏れていた……。全員が着席して、少し遅れの授業が始まった。今日の予定は、明日からの試験に出るかもしれない、重要なポイントを教えてもらう大事な授業なのだ。

洋子は今まで教えてきた課題を、黒板に箇条書きにしながら説明していた。

「それじゃ、ここを読んでもらおうか、二十三頁の頭から。——チャビ、読め」

光一はギクリとして一瞬体が硬直した。やはり予感的中だ。

「あの……。ごめんなさい。僕、教科書忘れて……」

「お前、学校に何しに来てるんだ。勉強したくないのか」

「いや、それが……」

光一の教科書は、哲夫が平然として使っている。哲夫たちが使う教科書を他のクラスに借りに行ったものの、さっきのごたごたで、一冊だけ足りないことを忘れていたのだ。そういう時は、自分の教科書を差し出すしかない。そして、こんな時に限って指名されるのである。

洋子が教壇から降りて、光一に近づいて来た。

「やる気がないのなら、教室から出て行きなさい！」

教室の中に、まるで風船が破裂でもしたかのような乾いた音がし

た。

痺れた頬に手を当てた光一は、周りのくすくすと笑う声しか聞こえていなかった。

昼休みの昼食を終えた岡田浩二ら数人が、バスケ部室に集まって談笑していた。

いつもここで遊ぶ、というより、誰も邪魔する者がいない密室というのは、何でも話が出来る格好のたまり場となっていた。

「見たか、動揺した杉田の腐れ顔。嗤っちまうぜ、全く」と、向井健吾が鼻で笑った。

「何も気づいてないようだな。いつかチャビが喋るんじゃないかと思ってたけど、まだ大丈夫らしい」

岡田はノートを見ながらニヤニヤと笑った。

「言いたくても言えないだろう。これがバレたら殺されるぞ」

「本当にここまでやってくれるとは、ありがたい話だ。チャビには無理だと思ってたからな。いつも杉田に睨まれてるし」

「しかし、間違いないんだろうな。もしチャビがでたらめに書いていたら、やばい事になるんじゃないか」

健吾が不審な目でそのノートを見返していた。

「どうだ政雄、間違いなかったか」

部室の隅で漫画本を見ていた西村政雄に、岡田は訊いた。

「大丈夫、寸分の狂いもない。よくぞここまで書けたもんだ」

「何だ、もうここに行って来たのか？ 早いなあ」

健吾は、仲間たちの行動の早さに舌を巻いた。

部室前の廊下を走り抜ける数人の足音が聞こえて、部室の中に緊張が走った。誰にも聞かれてはいけない、密談の最中なのだから。足音が遠ざかるのを待ってから、岡田は慌てて隠したノートをシヤツの中から取り出した。

「ということは、ここでやるのか。場所が分かったんなら、早い方がいい」

そう言った健吾の目が輝いている。以前、村上勇一に不意打ちでやられたことがあるのだ。仕返しをするには、頭である杉田を潰さない限り、手の出しようもない。

「慌てるな、これだけじゃダメだ。あいつはバカじゃない。ここでやるのは簡単だが、後のことを考えて徹底的に潰さないと……」

岡田はそう言って、転がっていたボールを拾い上げると、力任せに壁に向かって投げつけた。

「ということは、普通科の奴らだけじゃなく、暴走族の方も……」

健吾が一瞬、怯んだような表情を見せた。哲夫が所属する暴走族は、この町では名の通った大きな集団だ。もちろん走るだけではなく、凶悪な暴行を繰り返しながらの行軍なのである。

「心配するな、手は打ってある」

「暴走族に知り合いがいるのか？ まさか岡田も暴走族に……」

「バカやろう！ 俺は集団でしか行動できないような虫けらは嫌いなんだよ」

「じゃあ、チャビか。あいつをスパイにして」

「まあ、そんなところだ。——言っとくけど、チャビはな、お前らみたいな臆病者じゃないぞ。本当に窮地に立たされたら、何をするか分からない。〈窮鼠猫をかむ〉というだろ。お前らも気をつけろ」

岡田はそう言って部室の中にいる全員を見回した。そして床にノートを広げると、続けて話し始めた。

「とにかくみんな集まれ。とりあえずこの場所は頭に叩き込んでおかないと」

集まった仲間たちに、岡田はノートをペンで指しながら説明し始めた。

ノートには、哲夫の自宅までの道のり、そしてその周辺の地図、ましてやその家の外観までが、詳細に描かれていたのである。

その六

カバンを三つ抱えた光一は、息を切らしながら小走りに付いて行くのが精一杯だった。自分のカバンも入れたら四つということになるが、いつものことを考えれば、今日は少ない方だ。

学校の裏門を出て、哲夫たちの後を追う。

毎日の日課ではあるが、ここから駅までの道のりは、光一にとってどれほど長く感じているか、誰にも想像することなど出来ない。

杉田哲夫のすぐ後ろを歩く。光一の後ろから、村上勇一と？木典雄が、ふざけ合いながら、傘をヤリに見立てて光一の背中を狙ってくる。背中に背負ったカバンを狙っているが、傘の先はその間を縫って、時に背中に当たった。

激痛が走るが、声には出さない。誰も助けしてくれないし、笑われるだけだ。

しかし、三回目に飛んで来た傘は、光一の体をかすめてしまった。その尖った傘先が、哲夫の左肩に当たったのだ。

「いてっ！」

哲夫が立ち止まる。

傘を投げた村上の顔から血の気が引いてきた。ま、まずい……。

「ご……ごめん、哲夫君！」

「——誰が投げた」

哲夫は振り向いて、そう言った。

「チャビを狙ってて、手元が……」

「こんなもんが当たったら、痛いに決まってるだろ」

哲夫は傘を拾い上げた。

飛んでくる。投げ返して来るだろう。村上は哲夫の性格をよく知っている。たとえば日頃仲良くしていても、キレたら何をしてくるか分からない。

「ごめん、ご——」

突然、哲夫が傘をスツと差し出した。

「気をつけろ」

そう言っつて、哲夫は歩き出したのだ。

村上と？木は、呆氣に取られていた。もちろんそれを見ていた光一でもある。

「それから、お前ら先に帰れ。俺はちよつと寄る所がある。チャビ、一緒に来い」

「は、はい」

村上と？木は、わけが分からず突っ立っていると、

「早く帰れ！」

哲夫が一喝した。

二人が光一からカバンを受け取り、走り去ると、哲夫はゆつくりと歩き出した。その後を、光一は付いて歩く。

「——チャビ」

哲夫が背中越しに言った。

「はい」

「学校、面白くないだろ」

光一は黙っていた。

「俺も面白くない。分からんだろうな」

何かあったのだろうか。いつもの哲夫と様子が違う。

しばらく二人は黙ったまま歩いていた。

どこで切り出そうか。光一はここ何日も悩んでいたが、今しかない。

光一は思い切つて声をかけた。

「哲夫さん、あの……」

哲夫が立ち止まる。

「どうした。お前から話し掛けて来るなんて珍しいな」

「実は、お願いがあるんですけど……」

光一は、自分を落ち着かせようと、何度も大きく息を吸い込んだ

……。

(四)

クラシッくな雰囲気が漂う洒落たショットバーの中は、宴会やパーティーから抜け出して来たようなカップルたちが、朝までの予定でも話し合っているのか、仲睦まじく囁き合っている。

古い木材を使った椅子、長い年月の傷跡が残るカウンター。その上には色鮮やかなカクテルが並べられ、薄暗いと感じるほど明るさを落とした照明が、更にカップルたちの頬を上気させているようだった。

若者が多く集まるこの店の小さなテーブル席に、ここの雰囲気には似つかわしくないカップルが、まるで討論会でもしているような難しい顔で向き合っていた。

「とにかく、あの学校の体質はおかしいと思わないか。何だか、自信がなくなって来そうだ……」

男はそう言って、こんな場所で誰も飲まないような爛酒に口をつけた。

「もう仕事の話はやめてよ。ここは学校じゃないんだから」

園田洋子の大きな声に、周りの客が振り向いた。久しぶりのデートだというのに、ちっとも楽しませてくれない沢村俊雄の言葉に嫌気が差してきたところだ。

「やっと二人つきりになれたのよ。池田先生ったら酔っ払っていつまでも帰らないし、あなただって三次会に連れて行かれようとするし……」

洋子はうつむきながら言った。

沢村は周りの眼を気にしながら、洋子に顔を近づけた。

「そんなに怒るなよ。仕方ないだろう、池田先生には聞いてもらわないといけない話もあるし、僕たちがこうやっているところを見られたら、後先どうなるか」

「何怖がってるの？　あなたが臆病だからそんなふうに見られるのよ」

「しかしね……」

「池田先生に何を話すのよ」

「だからこの前も言ったように、いじめの問題だよ」

「まだそんなこと言ってるの。いじめなんてないし、たとえあったとしても、弱い生徒に問題があるのよ」

「それは違うね。現に中野だって……」

と、沢村が言いかけると、洋子は身を乗り出して、

「あなた、出世したくないの？」

さらりと流すように言った。

洋子の意外な言葉に、沢村はつい口をつぐんでしまった。

もちろん考えないことはない。誰だって出世したいという願望は持っているはずだ。

しかし沢村は、何もしないまま上司にへつらって、肩書きだけを狙うようなことはしたくなかった。教師たるもの、子供たちの人間形成を優先することが、沢村の信条としてのことなのである。

「いじめの問題と出世、どう関係あるんだ」

「子供たちの世界に、大人が顔を出してはいけない部分があるんじゃないのかしら。子供は子供なりに、いろんな意味で過当競争を乗り越えなくちゃいけないと思うの」

「――大人は？」

沢村は怪訝な顔で訊いた。

今まで何度か密会を繰り返し、仕事や家庭から離れたわずかな時間を悦楽のためだけに過ごして来た二人だが、今日の洋子はいつもとは違う。何か心配事があるのか、洋子の表情は明るくなかった。

この店に入った時からそうだ。――半年前、新任の歓迎会が終了した後の帰り道、生活指導について上司と対立して、投げやりになっていた沢村に声を掛けた洋子と一夜を共にしたのだが、それからの洋子は、沢村にとって一種の安らぎの場としての存在だった。

それ以来、二人で落ち合うのがこの店で、学校では厳しい顔をしている洋子も、ここに来ると、まるで少女のような笑顔で沢村を迎えていたのである。

しかし今日の洋子は、いつもと何かが違っていた。

「――大人だってそうよ。はじめにやっているだけじゃダメ。人間を、しかも子供たちを相手にしている商売なんだから、ある程度は厳しく、それから要領よくやっていかなきゃ、いつか自分が潰されてしまうわ」

「商売ねえ……」

「あら、そうじゃない。私たちは教育をしてお金を貰ってるのよ。生徒たちの成績が上がってこそ、私たちの成績も上がっていくのよ。スポーツクラブが優勝しても、テストの点数が悪かったら何にもならないの」

「そうかもしれないけど、何だか納得いかないね。現に助けを求めている生徒もいるんだから」

「それって、チャビのこと？」

沢村はしばらく言葉を失った。

「――君は教師だろう。生徒にそんな呼び方をするのか」

「あら、可愛いニックネームじゃない。その割にはちよつと情けないけどね、あの子……」

「そうじゃないんだ。中野をそうさせている何かがあるはずなんだ。それを分かってやるのも教師の役目じゃないのか」

「あな た っ て、バカがつくぐらいお人よしなのね。――時には裏切りも必要なのよ」

洋子の言い方は、沢村の背筋を一瞬ゾクツとさせる響きがあった。今までの洋子とは何かが違う。ここまで沢村に讒言することはなかったし、妙な意味合いを含んでいる洋子の言葉が沢村には気になっていた。

「それで、今日はどうするの？」

単刀直入に、ホテルに行くのか行かないのか、と訊いているので

ある。

「そうだな……」

と、沢村は曖昧に言った。「明日の朝から、中野の家に行ってみようと思ってるんだ」

「チャビの？」

「この三日間、風邪で休んでいるんだが、ちょっと気になってね」

「あら、それはお気の毒に。――それじゃ、もう帰るしかないわね。行きましょ」

洋子は意外にあっさりと立ち上がった。

いつもの洋子なら「もうちょっと私のそばにいて！」と甘えて来る。妻子持ちの男にとってはつらい言葉なのだが、それがなんとも可愛く見えてしまうから困ってしまうのである。

沢村は残った酒を飲み干そうとしていると、洋子は伝票を取り上げてレジに向かって歩き始めた。

「ま、待てよ。俺が払うから」

沢村が慌てて追いかけると、

「結構です。いつもご馳走になってるだけじゃ気の毒ですから」

「どうしたんだよ。何をそんなに怒ってるんだ」

「怒ってなんかいないわよ。私もこれから予定があるの。早くしないと遅れるわ」

さっさと勘定を済ませた洋子は、沢村のことなど全く気にしていない様子で、その店から出て行った。

外に出ると、深夜の繁華街を横行闊歩する恒例となった暴走族の集団が、爆音を上げて通行人を刺激していた。

以前は週末にしか出でていなかったのだが、最近はクリスマスが近いということもあって、毎日のように暴走を繰り返している。パトカーのサイレンが聞こえてきて、クモの子を散らすように集団が消えて行った。所詮、イタチごっこなのである。

「ちょっと待てよ、洋子」

歩き出そうとしていた洋子に、沢村は慌てて声をかけた。

「あの連中に絡まれないように気をつけてね。あいつら、酔っ払いのおやじを狙ってるんだから」

そう言った洋子は、いつもの帰り道ではない、クラブやバーが密集しているビル群の中に消えて行った。

呆然と立っている沢村の足下で、暴走族が投げつけた爆竹が炸裂した。我に返った沢村は、振り向いて、

「バカやろう！ お前ら――」

と言い掛けた言葉が喉元で詰まった。いつの間にか散らばっていたはずの集団が、再びその勢力を取り戻していたのである。

数台の改造オートバイが、交差点の真ん中で、爆音を鳴らしながら周回を繰り返している。

四方に広がる道路には、青信号にもかかわらず、前に進めない車の列で渋滞しようとしているし、歩道から溢れた若者たちのギャラリ―は、暴走族を煽り立てるようにバカ騒ぎを繰り返していた。

爆竹を投げたと思われるバイクが二台、アクセルを吹かしながら沢村に近づいて来た。

沢村は身の危険を感じて、早くここから立ち去らないといけないと思ったが……。

「おい、オッサン！ 何ボートと突っ立ってんだよ！」

鉄パイプを振り回しながら、後部シートに乗っている少年が叫んだ。

「大人はいいよな。酔っ払ってネーチャンに甘えてりゃいいんだもん。金もあるだろうしよ」

オートバイを運転している金髪の少年がぼやきながら、二台のバイクで沢村を取り囲むようにして止まった。

「オッサン、楽しかったかい。襟元に口紅でも付けてんじゃねえのか」

「どれどれ、確認してみようか」

鉄パイプを持った男が、その棒で沢村のあごを持ち上げた。

「や、やめないか、君たち！」

思いつき怒鳴ったつもりだが、沢村の声は小さく震えている。

「おっ、威勢のいいオッサンだぜ。どうやらこの鉄パイプと勝負するらしいな。あんたの骨と鉄パイプ、どっちが硬いかなあ」

そう言った男はバイクから降りると、腰に刺した刀を抜き取るような仕種で、ゆっくりと近づいて来た。

沢村は後ろに退がろうとしたが、もう一台のバイクに乗った少年が沢村の腰を弾き飛ばして、その身体は前のめりに突っ伏していた。「ははっ、なんだ、やっぱりビビッてやがるぜ」

そう言った少年は、「なあ、オッサン、お願いがあるんだ。俺たちちよつとばかし金が足りないんだよ。哀れな俺たちに恵んでくれないかな、少しでいいからさ」

そう言いながら、ゆっくりと鉄パイプを振り上げた。

それが振り下ろされようとした瞬間、もう一台の後部シートに乗っていた少年が駆け下りてきて、鉄パイプを握り止めた。

「兄貴、待ってください。このオッサン、金なんて持ってないですよ」

「何だ、今さらやめろってえのか」

「そんな顔してないでしょ。もっと金持っていそうなオッサンにしましょうよ」

そう言われた少年は、鉄パイプを握り直して、沢村に近づいてしやがみこんだ。

「オッサン、持ってないのか、金」

「——ないよ！ お前らなんかにやる金なんて、持ってるわけがないだろ！」

沢村の足は震えていたが、少年から目を離さないように気をつけながら言った。目を逸らしたら負けだ。

「ま、いいや。他をあたるか」

少年はそう言って立ち上がると、「どうだオッサン、俺たち、怖いか？」

沢村は答えなかった。いや、あえて答えないようにしたのである。

こういう連中は、何を言っても付け上がるだけなのだ。

「じゃ、行くか。——オッサン！ こいつに感謝しろよ。こいつが助けたようなもんだからな」

そう言った少年は、止めに入ったその男に鉄パイプを渡すと、

「このオッサンはお前に預けた。好きなようにしな」

と言って、再びバイクにまたがった。

いつもであれば、金を持っていけないオヤジに対して、ある程度の暴行を加えるのがこのグループのしきたりになっているのだ。

「いいっすよ、兄貴。殴ったところで金が出てくるわけじゃない。行きましょ。——ほら、警察が！」

数台のサイレンの音が遠くから聞こえて来た。

みんながバイクに乗ってアクセルを全開させた。

少し距離を置いて止まっていたオートバイが、沢村の視界に入った。その後部座席に乗った少年と、一瞬目が合う。

沢村の体が、何かに反応した。それが何か、沢村には分からない。ただ、その目が、どこかで見たことがあるような、そんな気がしてならなかったのである。

数台のパトカーが交差点に差し掛かると、無数の爆竹が鳴り響いた。暴走族の中で決めてある撤収の合図だ。

改造バイクが四分五裂して行く中で、沢村の少し前で止まったままだったバイクが、遅れて走り出した。

後部シートの少年は、沢村を見つめたままだった。

その七（前書き）

更新が遅くなりました。

これからこの作品一本に集中しますので、ぼちぼち更新させていただきます。気長にお付き合い下さい。

その七

暴走族の拠点になっているのは、港の倉庫だとか、山に差し掛かった廃屋などが主流であるが、このグループは、繁華街に近い潰れたばかりの工場が集合場所になっていた。

進入禁止の札が下がったロープを潜って、雑然と置かれた古い機材やドラム缶の周りに集まった暴走族のメンバーたちは、酒やタバコはもちろんのこと、シンナーが入った缶を楽しそうに回している者もいる。中には、今日の成果を評価しようと、通行人から奪った金品をひけらかすように自慢している少年もいた。

雪がちらつき始めたばかりということで、外で騒いでいたメンバーたちは、屋内に作られたドラム缶のストーブの周りにたむろしていた。

「何だか今日は、中途半端だよな。つまらねえ……」
リーダーの北村武志が、今まで収穫した物品を確かめながら呟いた。

なにしろ今日の警察の出動が、いつも以上に早かったのだ。もちろん誰かの通報があったことではあるが……。

「金持ってそうなおヤジがいなかったんですよ。シケた奴ばかりで、やっぱり世の中、不景気なんだよなあ」

ビニール袋を口に当てた金髪の田上信弘が、そう言ってドラム缶を蹴飛ばした。すぐに座り込んでしまったのは、シンナーのせいで力加減が分からず、蹴りつけた足が痛かったのだろう。

「しかし今日はパトカーの数も多かったよな」

武志がそう言うと、

「あいつらも暇なんですよ。——でも、国民の税金で飯食ってる奴らが、俺たちを捕まえようとするんだ。納得いかねえよな……」

足をさすりながら、信弘が愚痴をこぼす。

「お前、税金払ったことあるのか？」

「あるわけないっすよ」

へへっと笑った信弘は、「でも、何であのオヤジ助けたんだ。お前の知り合いか？」

グループから離れて一人で立っている少年に、信弘が言った。問いかけられた少年は、黙ったまま下を向いている。

「――何のことだ」

北村武志が不審そうに訊いた。

「酔っ払いのオヤジをかつ上げていたら、やめたほうがいい、って止めやがったんですよ、こいつ」

「おい、お前、ちょっと来い。――見かけない顔だな」

武志が少年の顔を覗こうとすると、

「待ってください。こいつは新人ですから、何も知らないんです。俺に任せてもらえませんか」

男が近づいて来て、武志の顔色をうかがうように言った。

「何だ、お前が連れてきたのか」

「はい、勝手なことをしてすみません。ちゃんと教育しますから、今回は……」

「――ふん、好きにしろ」

武志の投げやりな言葉だが、それだけ信頼されている男なのだ。うなだれている少年の腕を引いて、男は廃屋となった工場の事務所跡に入って行った。

「危なかったな。普通なら半殺しにされるんだ。もうあんなことはしない方がいい」

「はい……」

「しかしお前も変わったな。よくついて来たぜ、チャビ」と、杉田哲夫が言った。

「でも、沢村先生にバレたかも……」

光一は、今にも泣きそうな顔をしている。

「何、知りません、って突っぱねとけば何てことねえよ。俺だっていつもそうだろ。まさかチャビが暴走族に入ってるなんて、誰も思

わないさ」

哲夫は笑いながら煙草に火をつけた。

そう言われても、未知の世界である暴走族に、哲夫に頼み込んで見習いとして入れてもらった光一には、族の団体行動が分ならず、失敗した自分の姿だけしか見えなかった。

「でも、沢村先生……」

「何が怖いんだ？ 沢村か、リーダーか。それとも俺に、何か隠していることがあるんじゃないのか」

「いえ、そんなことはありません！」

「お前が暴走族に入りたいって言って来るのもおかしいだろ。どうしても、って頼むから連れて来たけど、本当の目的は何だ」

哲夫が不審に思うのも無理はない。今まで散々いじめられて来たというのに、光一が自分から虎口に入って行くような度胸がある男とは思えなかったからだ。

——三日前の放課後のことだ。哲夫のカバン持ちをしながら、突然、暴走族に参加させてくれと言って来たのだ。理由を訊けば「強くなりたい、度胸をつけたい」とか、「哲夫さんに根性を鍛えてもらいたい」などと、わけの分からないことを口にするだけで、本意が？めないのは事実だ。しかしどうせすぐに音を上げるだろうと、昨日の集会からおもしろ半分は光一を参加させていたのである。

「だから僕も、強くなりたくて……」

光一は言葉を飲み込んだ。

哲夫は小さく笑ってから、

「まあいいだろう。たとえ失敗があったとしても、チャビがいるってことがこんなに面白いとはな」

「ごめんなさい……」

「しかし、田上のケツに乗せたのは、ちょっと無謀だったかな」

哲夫のバイクに乗せるはずだったのを、おもしろ半分は田上に任せてみたのだ。

足下に落とした煙草を、哲夫は靴のかかとで踏みつぶした。

「ところで、三日も休んでるけど、学校には何と言ってあるんだ」
「大丈夫です。風邪で休んでる、ってことになってますから。もう学校に行っても分からないと思います」

光一はそう言って、いくぶん腫れが引いた顔に手をやった。そう、三日前のあの日、光一の本心を探ろうと哲夫が強烈な褒美を見舞わせたのだ。

外を見ると、暴走族のグループが少しずつ散らばっていた。今日は早めの解散だ。

帰って行く仲間に手を挙げて挨拶をしていた哲夫は、光一を促して事務所跡から出ると、最近改造したばかりの愛用のバイクにまたがった。

「――哲夫さん。今度の集会はいつあるんですか？」

光一は自分の自転車を引きながら言った。

「そうだな……。その時はまた教える。それまで待ってる。いいか、明日からはいつも通りにしてるんだぞ、学校ではいつものチャビだ」
「分かってます」

哲夫はバイクのエンジンを始動させて走り出そうとしたが、何か言い忘れたように振り向いた。

「チャビ！ あいつは元気にしてるのか」

「は？ あいつ、って……」

「バスケット部の岡田ちゃんだよ。最近おとなしいようだが……」

光一はすぐには返事が出来ずにいた。そしてその顔色が一瞬変わったのも、哲夫は見逃さなかった。

「俺がよろしく言ってたと伝えろ」

光一は何も言う暇がなかった。

気がつけば、哲夫のバイクが走り去っていく爆音が、光一を打ちのめす雷鳴のように鳴り響いているだけだった。

一人残ってしまった光一は、包まれるような恐怖感の渦巻いた大海の中に、ポツンと置かれたような気がしていた。

――仕方ない。すべて自分でやっていることなのだから。

光一は、そう言い聞かせるしかなかった……。

その八

(五)

玄関の呼び鈴が鳴って、中野良子は炊事の手を止めた。

光一の父である中野隆司は、出勤前の朝食と格闘している。寝起きの悪い隆司は、箸を持つのももどかしいほど朝は苦手なのだ。

「誰だ、こんな朝っぱらから……」

「何言ってるの。早くしないと遅れるわよ!」

良子は焼き上がった目玉焼きをテーブルに置いてから、玄関へと走って行った。

こんな時間に誰だろう。朝からの来客はほとんどないのだが……。

良子は戸惑いながら玄関のドアを開けた。

「おはようございます。あの……」

男は戸惑っていた。

見たことがある。いや、どこかで会ったことが……。

「――あのう、もしかしたら、先生……」

「はい、光一君の担任で――」

「沢村先生! ごめんなさい。久しぶりなものだから、つい忘れて」
良子は慌てて頭を下げた。何しろ家庭訪問のときに一度会っただけなのだ。思い出すのに時間がかかるのは仕方ない。

「風邪の具合はいかがですか。三日も休むなんて初めてのことですからね」

「ご心配をおかけしまして……。もう大丈夫ですわ。さっき元氣よく出掛けて行きました」

「おや、もう行ったんですか」

「ええ、お友達が迎えに来てくれましてね」

「友達?」

沢村は一瞬、戸惑った。友達と登校するようなことは今までなか

ったからだ。いつも一人で数人分のカバンを提げて、校門の近くで持ち主に渡すという光景を、沢村は何度か目撃していたのである。

「誰が迎えに来たんですか？」

「ええと……。杉田——そう、杉田君とか、って言っていましたわ」

「杉田ですか！」

「感じのいい子でねえ。あんなにいいお友達がいたなんて、全然知りませんでした。この家にあの子の友達が来たことなんて、今までなかったんですよ」

良子が喜んでいることは、その表情を見れば誰にでも分かるだろう。

まだ登校するには早過ぎるような時間だ。もしものことを考えて、沢村は早めに来てみたのだが……。

もし中野光一がいじめられているとしたら、要注意人物は杉田哲夫だ、と沢村は思っていたところなのである。

「杉田に会ったのは、初めてですか？」

「ええ。ちゃんと挨拶もできるし、利口そうな子でしたわ。光一の身体を気遣ってくれましてね。顔のアザなんかも心配してくれて……」

「アザ……と言いますと？」

「三日前に、自転車で転んだらしいんです。全くドジな子供ですからね。よく転んで怪我をしてくるんですよ」

良子はそう言って笑った。

しばらく考えていた沢村だったが、良子の顔を見返していぶかしくように訊いた。

「本当に自転車から転んだんですか？」

「——と言いますと？」

「いや、はつきりしたわけじゃないのですが。例えば、誰かにいじめられた、ということは考えられませんか」

「いじめ……ですか？ さあ、光一は何も言いませんから」

良子の顔が、心配そうな表情に変わった。「あの子がいじめられ

ていると……」

「いえ、決してそういうわけでは……。もしかしたら、ということ
です」

沢村は慌ててそう言った。母親に余計な心配をかけてはいけな
いと思ったからだ。

「――何かあったんですか。だって、わざわざ先生が来てくださる
のも珍しいことですし。そういえばあの子も最近、おかしいところ
がないわけでも……」

「いじめの情報があるのは事実です。しかし、真実を見ることがで
きません。光一君が標的になってるんじゃないかと心配になりまし
て」

と、沢村は言った。

しかし、この問題を言わない方がよかったのか、沢村は言っ
てしまった後に後悔した。まだ証拠を？ んだわけではないのだ。

「いや……ご心配なさらないで下さい。はっきりしたわけではない
ですから」

と、母親を落ち着かせて、「この三日間、光一君はずっと家にい
たんですね」

「はい……と思いますが……」

良子は戸惑って、「私が夜の仕事をしているものですから、いる
のかいないのか、さっぱり……」

と、うつむきながら言った。

夜の仕事をしているからといって、引け目を感じることはない。

逆に、人様が遊んでいる時間に仕事をしているのだ。もちろん朝昼
は、普通の家庭と何ら変わらぬ家事もこなしているのだから……。

「分かりました。元気になったのであれば、もう心配することはな
いでしょう。安心しました」

沢村はそう言って、「何かありましたら、いつでも学校の方に連
絡してください」

挨拶を済ませた後、良子に一礼して出ようとした。

「あの……本当に光一はいじめられていないんでしょうか」

「大丈夫です。すべて私が……」

そう言って歩き出した沢村だが、却って母親を不安感の中に陥れたようで、気が引けてならなかったのである。

中野光一の家を出た沢村は、その角を曲がったところで、出会い頭に少年にぶつかった。

その反動で転がってしまうほど、歩くことに神経を集中することができなかったのか……。

「おっと、ごめんなさいね。大丈夫？」

沢村は自分が痛いのも構わず、慌てて起き上がって少年に駆け寄った。

「は、はい……いえ。——先生！ 沢村先生じゃないですか。どうしたんですか！」

その少年は、商業科でバスケット部の岡田浩二だった。

沢村は岡田の腕を引いて身体を起こした。そして、岡田の手から落ちたノートを拾い上げようとしたが、

「大丈夫です！ 自分でやりますから！」

そう言うと、沢村が取り上げようとしていたノートを、奪い取るように？ んだ。見られてはまずいことでも書いてあるのか、沢村は訝って岡田を見据えた。

拾ったノートをカバンにしまい込んだ岡田は、

「すみません、ちょっと急いでいるもんで……」

と言って、歩き出そうとしたが、

「学校はそっちじゃないぞ。どこかに行くのか？」
と、沢村に訊かれて立ち止まる。

「友達と待ち合わせしてるんですよ」

岡田は振り向いて、「先生こそ、何してるんですか？」

「俺のクラスの生徒が休んだから、迎えに来たんだが……」

「休んでた、って——もしかしたら、チャビ……」

「お前も中野と待ち合わせなのか？　もう学校に行ったそうだが」
意外な、という顔をして、沢村は言った。

「えっ！　もう行ったんですか？」

「友達が迎えに来たそうだ」

「友達って？」

「杉田だよ。――お前は商業科だから、分からないかな」

「杉田……」

その名前を聞いて、岡田の顔色がスツと変わった。

「どうしたんだ」

「――いえ、何でもありません」

岡田は気を取り直したように、「それじゃ、学校で会いましょう！」

と言って、先を急ぐように駆けて行ったのだった。

午前八時半の登校時間を知らせるチャイムが鳴り始めると、学校の近くでは、短距離ランナーの如く全力疾走で校門を駆け抜ける生徒が何人かいるものだ。

遅刻常習犯の村上勇一も、いつものように疾走していた。

チャイムが鳴り終わると同時にゴールテープを切った勇一は、息も絶え絶えで教室にたどり着いた。

教室の中を見回した勇一は、先に来ていた中野光一の姿を見つけると、

「チャビ！　俺のカバンはどうした！」

と詰め寄って、「どうして外で待っていなかったんだよ！」

いかにも嘯み付きそうな様子だ。

「いや、それが……」

言葉に詰まった光一に、勇一は、

「この野郎！」

と言って、殴り掛かろうとした。しかしその手が振り下ろされようとしたとき、勇一の腹に激痛が走った。

「やめろ。――余計なことはするな」

杉田哲夫の足が、勇一の行動を制止したのである。

勇一は床に転がった。

「哲夫君――どうしたんだよ」

「チャビに手を出すな。分かったか」

聞いて驚いたのは、他でもない、光一だ。

震えている光一に、勇一を見下ろしながら哲夫が訊いた。

「こいつのカバン、どうした」

「それが、僕の家……だ。だって、突然哲夫さんが来たから、びっくりして忘れてしまいました。――ごめんなさい！」

光一はそう言って、勇一に頭を下げた。

「勇一！ お前はチャビにカバンを持たせてるのか」

「ああ、いつもそうじゃないか。哲夫君だって、チャビに持たせてるだろ」

「俺はいいんだよ。――他にいるか？ チャビにカバンを持たせてる奴は」

と、周りを見回して、「何人分、持って来るんだ？」

哲夫は光一に訊いた。

「今日は五人分――いや、六人分でした」

「六人分か……。お前ら！ 明日から、自分のカバンが自分で持ってくる来い！」

哲夫が一喝した。

教室の中にいる生徒たちは、哲夫の変わりように驚いている。そもそも光一を率先して使っていたのは、この杉田哲夫なのだ。〈ご褒美〉と名付けられた暴力も、哲夫の命令でやっていることだって少なくないのである。

その哲夫が、光一を庇っている。どうした心境の変化なのか、勇一たちは、言葉もなく哲夫を見ていた。

「分かったか！」

「ど、どうしたんだよ、哲夫君……」

勇一が小さな声で訊いたが、

「カバンだけじゃない。パシリも、暴力も、今後いっさい禁止だ。もし、チャビに手を出すようなことがあったら、俺が黙っていないということをお忘れな」

哲夫は勇一を睨みつけて、「こいつは今までのチャビじゃない。本当の男になろうとしているんだ……」

そう言っ、自分の席に着いたのである。

光一はただ呆然と哲夫を見ていた。――どうして哲夫が自分を庇うのだろう。無理を言っ、暴走族に入れてもらったからか？ 哲夫から逃げずに、自分から食らいについているからか？ いや、違う。そんなことぐらいで態度を変えるような男ではない。しかも光一の行動は、岡田浩二との密謀の上での事なのだ。もしそれが分かっているのであれば、今ごろ光一は、半殺しにされているはずだ。

それじゃ、他に何か……。

しかし、自分から哲夫に訊くわけにもいかない。それは、自ら墓穴を掘るようなものだから……。

「チャビ！ 一時間目の授業は何だ」

哲夫はいつものように訊いた。

「ええと――日本史です」

「俺の教科書は」

「ちゃんと用意してあります」

「ああ、ありがとう」

と珍しく礼を言っ、光一から教科書を受け取った。

「それから、今日のお昼は、何が……」

「そうだな。ホカ弁のカレーにでもするか」

「カレーを。分かりました。大急ぎで行ってきます」

と言っ、光一が自分の席に着こうとすると、

「それから、買っ、来るのは俺の分だけでいいからな」と、哲夫は言っしたのである。

いつもと変わらぬ同級生の上下関係。

しかしその光景は、仲のいい友人のじゃれ合いにも見えていたの
だった……。

その九

(六)

日もとつぷりと暮れて、人影も少なくなった道を一人で歩いていった村上勇一は、不機嫌そうに石ころを蹴飛ばしていた。

いつもの自宅へ帰る道ではない。杉田哲夫に叱られて、自分のカバンを光一の家に取りに行っているところである。

「何で俺がチャビの家に行かなきゃならないんだよ……」

そう呟きながら、「面白くねえ!」

思いっきり石ころを蹴飛ばしたつもりだったが、運動神経が鈍いせいか、空振りして転んでしまった。

「くそう! チャビの奴!」

悪いのは自分なのに、何でも光一のせいにしてしまう。

しかし、勇一が気になっていたことは、そんなことよりも、哲夫の豹変振りだった。

光一が学校を休んでいる間に、何かあったのだろうか。勇一は学校でしか哲夫に会うことはない。暴走族に入っていることは知っているが、まさかそこに光一が参加していたなどとは、知る由もないのである。

「今晚は……あの……」

チャイムを鳴らした勇一は、開いたままになっている玄関から声をかけた。

「はいはい、どちらさんかな?」

応対に出たのは光一の父親である、中野隆司だった。

「あの……光一君は……まだ、帰ってませんよね」

「ああ、たぶん部活で、遅くなるんじゃないかな」

「実は、僕のカバンを光一君に預けてあるんです。それを受け取り

たくて来たんですが……」

「カバンを？　――わしには分からんなあ。光一の部屋に置いてあるのかな」

「ええ、たぶん」

勇一としては何とも言いようがない。相手に合わせるしかないのだ。

「だったら、中に入って持っていきなさい。光一には、わしが後で言っとくから」

と、中野隆司に言われて、勇一は光一の部屋へと案内された。

雑然としたその部屋の隅に、勇一のカバンが転がっている。何となく部屋を見回してみると、本当にバスケットがすきなのか、有名なプロバスケット選手のポスターが至るところに貼ってある。勉強机の上にも、バスケットをテーマとした漫画の本が山積みされていた。

勇一が自分のカバンを取り上げて部屋を出ようとしたとき、足下に落ちている紙切れに目が止まった。

「これは……」

勇一は、思いもよらぬ出来事に一瞬当惑した。中野隆司の足音が聞こえて、慌ててその紙切れをポケットにねじ込んだ。

「カバンはあったかね」

「は、はい」

「ゆっくりしていけばどうだ。そのうち帰って来るだろう」

「いえ、僕ももう帰らないと……。お邪魔しました」

と勇一は、逃げるように飛び出して行ったのである。

光一の家を出て、少し離れた所にある街頭の下で立ち止まった勇一は、ポケットにねじ込んだ紙切れを取り出して開いてみた。

「まさかあいつが、こんなことを……」

それは、杉田哲夫に対する襲撃の計画案が、事細かに記されていたのである。

と言っても、この紙切れは下書きにしていたものらしい。黒く塗

りつぶされた所や、書き換えられた所もあるし、途中から千切れてしまつて、大事な日程などは読み取ることができなかった。

しばらく考え込んでいた勇一は、複数の人の気配を感じて視線を上げた。

「な、何だ、お前ら……」

八人、九人……いや、十人はいるようだ。同じ高校生風でもあるが、帽子を深くかぶり、マスクをしていて顔は分からない。

気がつけば、勇一はいつの間にかその集団に取り囲まれていた。

「――村上か」

リーダー格と思える男が、一歩進んで勇一の前に立った。

「だ、誰だよ……お前……」

相手が一人であれば、多少はハツタリでもかましてしまうところだが、大人数ともなれば、むやみに行動することは命取りになる。

「何してるんだ」

「何、って……。お前に関係ないだろ！」

「関係ないことはない。お前に会いたかったんだよ」

男はそう言いながら、声を殺して笑っていた。

「卑怯じゃないか！ 一人じゃ俺の前に来れんのか！」

と言ったときには、勇一の身体はアスファルトの上に突っ伏していた。

どうやって投げられたのか分からないまま、勇一の身体は無数の足に蹴りつけられている。

苦悶に喘ぐ勇一は、何の抵抗すらできない。助けを求めようと思つても、口を開く少しの時間さえ与えてくれなかった。

「どうだ、苦しいか」

「やめてほしかったら、涙を流して土下座してみろ」

と言いながらも、一方的な暴行は続いている。

「何だよ、情けねえ。いつもの元氣は空威張りかよ」

一人の男がかみ込んで、「お前、金持ってないか。ちよつと拝借するぞ」

と言って、勇一のポケットをまさぐり始めると、紙幣と間違えて取り出したその紙切れを、街頭の明かりにかざしてみる……。

「何だ、こりゃ？」

と言ったその顔が、一瞬険しく曇った。

「——おい、この紙切れ、どうしたんだ？」

リーダー格がそれを受け取って、勇一の髪を引っ張り上げて問いただそうとした。

「し、知らねえよ！ お前らに関係ないだろ！」

と、勇一は叫んだ。「——お前ら、もしかして……」

勇一は手を伸ばして、男のマスクに手をかけた。

練習の終了後、部室に集まったメンバーに笑顔で語りかけるキャプテンの迫田洋二の姿があった。最後のクラブ活動なのである。

「みんな、よくやってくれた。県大会は惜しくも準優勝だったけど、本当にいい思い出を作ってくれたみんなに、心から感謝する。ありがとう！」

そう言いながら、メンバーの一人ひとりに握手を求めた。

「キャプテン、俺、寂しいっすよ……」

「あと一年、この高校にいてくれませんか。お願いだから、落第してください！」

そんな無理難題を言われるほど、迫田への信望は厚かったのだ。

迫田は苦笑いして、メンバーとの握手を続けていった。

「みんなの気持ちは嬉しいけど、俺がいつまでもいたんじゃチームの成長はない。後はお前らが強くしていく番だ」

そう言って、迫田が伸ばした右手が、岡田浩二の前で止まる。

「キャプテン……」

慕っているキャプテンだけに、さすがの岡田も目頭を熱くしていた。

「これからのバスケ部は、おそらくお前が引っ張って行くことになるだろう。実力もついてきたし、精神的な不安もなくなったようだ。

プレーを見てればよく分かるよ」

「そんな、俺なんて、まだ……」

「ただ、お前に欠けているところは、統率力だろう。いくら自分が頑張っている、チームを引っ張っていくような能力がなければダメだ。これは技術や学力じゃない。人間性なんだ」

迫田がこんな話をするのは、メンバーの中ではこの岡田だけだ。

「まだ、俺には分かりません」

「今は分からなくていい。お前がトップに立てば、いやでも分かるようになるもんさ」

迫田はそう言って、岡田の手を硬く握った。後は任せたぞ、とでも言っているように……。

メンバーとマネージャーから、はなむけの花束が迫田に贈られた。後ろ髪を引かれるように、迫田は部室から消えて行く。静寂だけがそこに残った。迫田の存在がいかに大きなものだったのか、メンバーは改めて思い知らされたのだった。

——部室の中が静かになると、最後まで残って掃除をしているのは……。

「どうだ、何か変わったこと、なかったか」

と、岡田が訊いてきた。

「何か、って……。キャプテンのことなら……」

「キャプテンのことじゃない。あいつのことだ」

「あいつ……。はい、いえ。その……」

分かっている、いつも言葉に詰まってしまうのは、中野光一の癖というものか。

「そろそろ動きがあってもいいころだ。杉田はバカじゃない」

岡田はユニフォームを脱ぎながら、まるで自分に言い聞かせるように呟いた。

光一をスパイに仕立てて杉田哲夫の周辺を調査させ、傍若無人に暴走族にまで入り込んだ光一を、あの杉田哲夫が不審に思わないはずがない。

しかし、何の動きも見えないことが、岡田にとっては不安だったのである。

「教室の中ではどうだ。相変わらず、いじめられてるのか」

「それが、逆に優しくなるし、他の人にも僕をいじめるな、って……」

「杉田が言ったのか？」

「はい。何だかそれが、怖くて……」

一番不気味に感じているのは、何といっても光一である。優しくなるというよりも、哲夫は本当の友人になろうとでもいうような接し方に変わっていた。教室でも、暴走族と走っていても、哲夫はいつも行動を共にし、時には冗談すら言うようになっていた。

しかし、真意は分からない。「本当の男になろうとしている」と、哲夫は言っていたが、どういう意味だろう。暴走族に参加しているからか。それとも哲夫に自らくらいいついているからか……。

「なあ、チャビ。そろそろ始めようと思ってるんだ」

岡田が言った。

「始める……という」と

「あいつの住んでいるところや日常の動きが、お前のおかげである程度分かってきた。普通科の奴らを一人ずつ締め上げる。杉田は暴走族が絡んでいるから最後だ。なに、族といっても、どうせ下っ端だろ。学校内でけりをつけりゃ、何とかなるかもしれん」

岡田は自分なりに計画を立てているようだが、その話を聞いたただけでは、光一には納得いくはずがない。犠牲になるのは自分なんだから……。

「――いつからですか」

光一は汗ばんで来た手を握って、まるでそこに杉田哲夫がいるような目で、部室の壁を睨みつけている岡田に訊いた。

「もう、始まっているはずだ」

「――という」と

「一人ずつ締め上げてやる……」

岡田はそう眩きながら、硬く拳を握り締めていた。

その十

(七)

久しぶりのデート……といっても、所詮は不倫であって、自分は教職の立場にある。早くこの関係を清算しなくては、と考えているところなのだ。呑気に喜んでいるわけではない。

しかしここ最近、密会——という言い方自体、あまり好きではないが——することも少なくなれば、自分に対する態度も変わって来ている。

沢村俊雄にとって都合のいい話ではあるのだが、何とも物足りなさを感じていたのも事実なのだ。

「久しぶりに、いつもの店で待ってるわ」

そう言った園田洋子の言葉を、その店、ショットバーのカウンターで燗酒を飲みながら、沢村は思い返していた。

「久しぶりに、か……」

近ごろ笑顔さえ見せなくなった洋子だが、放課後の帰り際に見せたあの微笑みは、別れ話を切り出そうという沢村の思いを惑わせるものでもあるのだが……。

「ごめんなさい。待たせたわね」

いつの間にか、洋子が沢村の肩に手を乗せていた。

「いや、俺も今来たところさ」

「そんなこと言って、ここに並んでいる燗ビンは、何？」

「あれ、こんなに飲んだかなあ。これ、俺のか？」

「記憶がなくなるほど飲んでるのね。それとも、歳のせい？」

二人は同時に笑った……。

久しぶりのプライベートな話に、沢村は気を良くしている。少し酔いが回ってくると、何事にも楽観的になってくるのが、沢

村の性格である。それが結果的に良くもなれば、悪くもなるというものだ。まあいいや、何とかなるだろう、明日になれば……。

そして朝、目が覚めたとき、「しまった！」ということが、今まで何度もあったはずなのだ。しかし性格というものは、そう簡単に変わるものではない。

今日だって洋子に誘われたとき、「もう会うのはやめよう」と断っていたれば、簡単に済んでいたかもしれない。二人の関係を怪しんでいる先生だっているのだから、これ以上、深入りしない方がいいはずだ。

そんなことが分かっていても……。

「君とこうやって会うことができ、俺は嬉しいよ」

沢村はそう言いながら、ぬるくなった酒に口をつけた。

「あなたって、ちっとも変わらないのね」

と言った洋子の顔つきが変わっていた。「周りはどんどん変わっているのよ」

「変わってる——というത്？」

「ほんとに鈍感なんだから……。今学期いっぱい、主任の池田先生、学校辞めるって知ってるの？」

教職員としては重要な話なのに、沢村にとっては初耳だ。その言葉は、沢村を現実の世界に引き戻したのだった。

「——本当か？」

「ということは、次の主任……ということでしょう」

「いや、それは分かるんだが」

「その候補に挙がっているのが——あなた。つまり、沢村先生もそろそろ役職に、ってことになっているらしいの」

洋子の口調は、いたって平淡だった。

学年主任というのは、普通の会社では重要な部長クラスに当たるだろう。そのポストに就くということなど沢村はまだ先の話だと思っていたのだ。今は信条としていえる生徒たちの人間形成の方が先決だ。しかしいつかは主任に、教頭に、そして校長まで上り詰めたら

……。

といっても、教職員の誰もが地位的な出世を望んでいるわけではない。第一線での教育に情熱を燃やしたり、クラブ活動で全国を目指すなど、教員の思いもさまざまだ。

「まさか……。俺より先に上がらなければならない先生だって、何人かいるはずだ。それに、まだ俺は何も聞いてない」

「まだ内々の話なの。だからまだ、誰も知らないと思う」

「知らない、って……。君は誰に聞いたんだ」

と沢村は言っ、洋子の顔に視線を送った。

「それは……。私もちょっと聞きかじっただけで、本当はどうなのか分からないわ」

「だから、誰に聞いたのかって訊いてるんだよ。主任が辞めるといふのは分かる。しかし後任に俺の名前が出るのはおかしいだろう」

洋子はしばらく返事をしなかった。そしてカクテルを一口飲んで、「あなたは主任になってもいいと思ってるのよね」

「どうしてだ」

「――もしもその話が直接来たら、辞退してくれないかしら」

と、洋子は言った。

「どうしたんだよ、その顔……」

？木典雄が、心配そうに覗き込んだ。

「何でもないよ。放っといてくれ」

「だって、その傷……。誰にやられたんだよ」

「誰って……。今さら説明する必要ない！」

そう言った村上勇一は、自分の机にカバンを叩きつけた。

まだ始業には少し早い時間だ。遅刻しなかっただけでも驚くだけの価値があるのに、その顔が見るに堪えないほど腫れ上がっている。周囲の関心を引くのは自然の成り行きだ。

早い時間といっても、ほとんどの生徒は教室に集まっている。来ていないのは、遅刻常習犯の何人かだけだ。

全員が勇一に注目を集める中、ただ一人無関心に何やら難しい本

を読んでいる男がいる。――そう、言わずと知れた、杉田哲夫だ。

「哲夫君――」

勇一はゆっくりと哲夫に近寄る。とその時、振り向いた勇一は、中野光一と視線が重なった。

その両目は見開いて、わなわなと震えている。

しかし勇一は、そのこと自体には関心を見せなかった。そして哲夫の耳元に顔を近づけて、何やらひそひそと話し始めたのである。

――光一には分かっていた。どうして顔が腫れているのか。誰にやられたのか。何の目的で……。

しかし、光一が関与していることは、まだ誰も知らないはずだ。ましてや哲夫にばれることは考えられない。自ら哲夫に食らいつき、暴走族まで参加しているのだ。そして、哲夫の態度は友好的なものに変わっていることだし、今さら勇一が何か言ったとしても、もしかしたら哲夫が助けてくれるのではないか、とさえ思っていたのである。

哲夫は本から視線を離さない。ただ勇一の話に、小さく肯いているだけだ。

話し終えた勇一はキッとつり上がった目を、光一に向けた。そしてゆっくりと近づいて来る。

反射的に、光一は立ち上がっていた。そして後退しようとしていた光一の腹に、勇一の足が力強く蹴り込まれたのである。

気がつけば。床にうずくまった光一の顔は、その足に踏みつけられていた。

「どうしてこんなことされるか、お前には分かってるよな」

勇一は少しずつ体重をかけながら、「言ってみろ！」

と訊かれても、光一が口を開けないのは、顔を踏みつけられているせいだけではなかった。

「ど……どうしてですか……」

「誰にやられたと思う」

「分かりません……」

「その連中からんでいる裏切り者がいる。誰だか分かるか」

「分かりません……」

光一の腹がえぐられる。

「そうか、分からないか。だったらしばらく、お前の身体に訊いてみようか」

「本当です。僕は何も……」

と言ってみても、勇一の暴行は止まらなかった。

勇一の形相は、いつものそれとは一変している。誰も手出しすること出来なければ、止めることすら出来ない。

哲夫が助けてくれるはずだ。——光一は、哲夫に視線を送ったのだった……。

足がくい込む鈍い音。苦痛に喘ぐ光一の悲鳴。哲夫にも聞こえているはずだ。

しかし……読書にふける哲夫は、何を考えているのか振り向こうともしない。

本の内容が面白いのか、それとも、光一の惨状がおかしいのだろうか。

哲夫は、ニヤニヤ笑っていた……。

その十一

(八)

その日の、一時間目終了後……。

国語の授業が始まる直前、中野光一の机の周りは、村上勇一を中心に数人の男たちに囲まれていた。

光一は椅子に座ったまま、声も出せずにただ震えていた。

——始業前、光一に対する勇一の暴行は、今までにない凄惨なものだった。腫れた顔、流れ出る鼻血は止まらず、泣き叫ぼうとする声さえも出させてくれなかった。

まだその時点では何も言わなかった勇一だが、今ここで、どうして殴られるのか、その理由を仲間に聞かせるようにして、光一を問いただしていたのである。

「だからお前は、岡田とグルになって、何か計画を立てている。違うか」

「知りません……」

「俺は昨日、お前の家にカバンを取りに行ったんだ。お前の部屋にな」

勇一は詰め寄って、「そこに何があったと思う」

と言われても、光一には何のことやらさっぱりと分からなかった。勇一が見つけ出した紙切れは、とっくに処分してあると思っていたのだ。

しかし、勇一の顔の傷は、岡田のグループにやられたことは間違いないだろう。

ということは、その時に自分のことを喋ったのだろうか。でも……。

「哲夫君を裏切ろうと思っている。いや、裏切るどころか襲撃だ」

「まさか——そんなこと、僕にできるわけが……」

「ちゃんと書いてあったんだよ！ お前の秘密の紙切れにな」

勇一はそう言って、赤く腫れた光一の頬を弾いた。

聞いていた？ 木典雄が、ごくりと生唾を飲み込む。杉田哲夫に逆らうということは、大げさに言えば命を捨てる、ということにもなりかねないのだ。

「本当か、チャビ！」

典雄は身を乗り出して、「お前もいい度胸してきたぜ」

と言って、光一の肩口を蹴飛ばした。

光一はただ硬直したまま、何も言えずに黙っている。バレているとしても、自分からは何も話さない方がいい。黙秘権——があるのかどうかは分からないが——を強行するだけだ。どっちにしても暴行されることは、今までの経験でいやというほど思い知らされているのである。

問題は、哲夫だった。自分の席に座ったまま、相変わらず難しい本を読んでいる。

「何を企んでいる。あの紙切れには、哲夫君が一人になったところを何人かで襲撃するようなことが書いてあったんだよ」

「哲夫君を？ 間違いないのか」

典雄が勇一に訊いた。

「ああ、チャビの部屋にあったんだ。何人か名前も書いてあったからな」

と、勇一は言うてから、「お前の名前もだぞ」

「俺もか。どういうことだ」

典雄が光一を睨みつける。

「こういうことじゃないのか」

勇一は腫れた自分の顔に手をやった。「俺の名前が一番上に書いてあったんだ。一人ずつやってしまおう、ってことだろう。な、チャビ」

もうだめだ！ 何もかもバレてしまっている。——どうすればいい

い。土下座して謝ってみるか。といって、それくらいで許してくれるはずもない……。

「哲夫君。どうするんだよ、こいつ」

勇一は、何も言わない哲夫に少々イラついていた。いつもなら、一番先に光一をいたぶっているはずだ。

「なあ、哲夫君——」

「うるさい！ 今いいところなんだ。邪魔するな」

哲夫は本から視線を外さないで言った。

「哲夫君……。だったら、俺たちがやってもいいんだな」

「やるって——何をやるんだ」

「お仕置きだよ。チャビに対してのな。もちろんご褒美なんていう生易しいもんじゃないぜ」

聞いている光一は、その言葉一つひとつが暴力となって、震える体を更に硬直させていた。

「このまま黙ってはいられないぞ」

典雄が言うと、

「好きなようにしろ。チャビも考えがあるんだろ。それなりの覚悟はできているはずだ」

「哲夫君は、何もしなくていいのか？」

「うるさい！ 邪魔をするなどいつているのは分からないのか！」

哲夫はそう言って、またその本を読み始めたのだった。

静かになった教室の中では、淡々と国語の授業が進められている。冗談一つ言うでもなく、園田洋子は教科書を読み進めていた。

ある文学を題材とした文法の授業だが、まじめに読むだけではなく、少しは面白くした方が子供たちには分かりやすいこともあると思うが……。

至って教育熱心な園田洋子は、笑いを取るより点数を取ってほしい、という考えしかない。もちろん漫談ではないのだから、笑いに重点を置く必要もないのではあるが。

「――分かりましたか。何か質問がある人は手を挙げて」

洋子は生徒たちを見渡したが、教室の中は静まり返ったままだ。

「では、次に――」

「先生……あの……」

おずおずと手を挙げた生徒がいる。

「はい、何か質問ですか？」

「いえ……その……」

そう言っただけ、もじもじとしている。

「言いたいことがあったらはっきり言いなさい！ 何だよ、チャビ！」

しばらくうなだれていた光一だが、席を離れて、ゆっくりと教壇に近寄った。

うつむいたまま、ただ下を向いている。何か言おうとしているが、どうやら言葉に出せないようだ。

「何だよ、シヨンベンか？」

洋子の言葉が男勝りになる。

「いえ……あの……」

光一は思い切ったように顔を上げて、「先生！ 好きです！ ぼ、僕と結婚して下さい！」

洋子はしばし呆然としていた。何と言ったんだろう。

――結婚？ 確かに私は独身よ。でも、何だって高校生からプロポーズされなきゃいけないの？ そんなに飢えているように見えるのかしら……。

「――何を言ってるのか、自分で分かっているんだろうね、チャビちゃん」

「だから僕と、け、結婚を……」

「お前はバカか！ 私を一生、食わせていけるだけの自信があるのか？」

「いえ……その……」

「なんて情けないことを言っているんだよ。だからいじめられるんだ

ぞ」

洋子は真顔になって、「もういいから、廊下に立っていなさい！」
苦虫を噛み潰したような顔をして、しぶしぶと教室を出る光一。
ドアを閉めた途端、教室の中は大爆笑に包まれた。

「バカじゃねえか、あの野郎。よっぽど先生のが好きらしいな」
「先生、結婚してやってくださいよ。ボランティアと思ってさ」
勇一が、ニヤニヤ笑いながら言った。

「ふざけるのもいい加減にしなさい！ どうせ誰かがやらせたんだ
ろう」

洋子は机に教科書を叩きつけて、「さ、授業、続けるわよ。やる
気がない人は、チャビと一緒に廊下に出てもいいんだからね」
と言ったその顔は、もう、いつもの教育者たる顔に戻っていた。

「次は、二十三頁。ちよつと難しいぞ、ここは。誰か読める？」

「はい、僕が読みます」

「さすがに出来る子は違うわね。——じゃ、杉田君、読んで」
指名された哲夫は、やや難解な文章を、いとも簡単に読み進めた
のだった。

——結局、光一はその授業が終わるまで廊下に立っていた。
教室を出た洋子は、一旦光一とすれ違ってから立ち止まる。振り
向いた洋子は、下を向いたままの光一に訊いた。

「——チャビ。本気で私と結婚したいと思ってるのか」

「いえ……いや……。はい……もちろん」

「いいわよ、結婚しても」

「——は？」

「もしそうになったら、夫婦生活が楽しみね。きっと毎日、お前の泣
き顔を見ることになるだろうから」

もちろん冗談で言ったのだろうが、その目は笑っていない。光一
には、洋子の姿が、まるで勇一の女バージョンに見えていたのだっ
た……。

洋子の姿が見えなくなっても、光一はしばらく教室の中に入れな

いでいた。勇一たちがニヤニヤ笑いながら、光一が戻って来るのを待っているはずだ。

そして、続きがあるのだろう。

いつまでも廊下に立っていたって仕方ない。光一はためらいながら、教室へ入って行った。

——気がついた時はもう遅い。目の前に、勇一が投げつけた机が宙に待っていたのである。

避けようとした光一の背中に、落下する机が直撃した。

「何だよ、あのザマは！ 抱きついてチューしろって言っただろ」

勇一が駆け寄ってきて、転がった光一の身体を踏みつけた。

「すみません……。僕には、どうしても……」

「これくらいでビビるんじゃないぞ。まだ始まったばかりだ」

勇一の表情は、ただいじめる、というだけの顔ではない。明らかに、憎しみがこもっている。

「さあ、第二ラウンドは、何して遊ぼうかな」

勇一は指を鳴らした。

「お願いです！ もう勘弁してください！」

「俺の顔はどうするんだよ。この腫れた顔は。お前の仲間がやったんだ。お前がやらせたんだよ」

「僕は、何も……」

「俺の次は誰だ？ もう決まってるんだろう。言ってみろ！」

自分がやられたということは、ここにいる連中はみんなやられるということになる。その最初の犠牲者が自分だったに違いない。おそらく一人ずつやられて行くのだろう。

あの紙切れに書いてあった数人の名前を、勇一ははっきりと憶えていた。

「典雄、気をつけろ。順番から行くと、今度はお前だ」

「俺が……。チャビ、本当か？」

？ 木典雄の唇が、わずかに歪んだ。

「いつだ。——場所はどこだ」

光一に訊いてみた典雄だが、答えるはずもない。

典雄は、小さな蹴りを、光一の顔に見舞った。

光一は何の反応も示さない。

また足が飛んだ。二発、三発……しだいに力が入ってくる。丸く縮こまった光一は、顔を抱えて身を守ろうとするが――足の数が増えて来たようだ。

気がつけば、無数の足蹴りの中で、光一は悶え苦しんでいたのがある。

激しい。激しすぎる。このままでは、本当に死んでしまうかもしれない。いつもいじめられているといっても、こんなことは初めてだ。

いつもであれば、暴力を振るうのは哲夫だけである。勇一たちは、哲夫の前では手を出すことは少ない。しかし、その哲夫は、何の関心も示さないように本を読んでいるだけだ。

「やめて……下さい。――助けて！」

光一が叫ぶと、あざ笑う声が聞こえて、

「チャビ！ こっちを向いてみる！」

指の隙間にある光一の目が、カッと見開いた。

勇一が持ち上げた机が、今まさに振り下ろされようとしていたのである。

「食らえ、チャビ！」

自分でも驚くような速さで起き上がった光一は、間一髪でそれをしのいだ。そして、無我夢中で教室を飛び出したのであった。

後は自分でも分からない。廊下を走り続け、一階までの階段を転がるように駆け下りて行く。そして、中庭を抜けて、隣の校舎に飛び込んだ。

どっちだろう。二階だったかもしれない。一瞬ためらった光一は、そこにある階段を一気に駆け上がる。

――あった！ 廊下の一番禺に、〈職員室〉と書かれた札が下がっていた。

背後から、無数の足音が迫っている。早くしないと……。

光一は駆け出した。職員室までもう少しだ。

足音が近づいた……。

目の前に、職員室のドアが見えている。

光一はドアに向かって手を伸ばした……。

その十二

「一気にやるしかなさそうだな」

岡田浩二が、小さな声で言った。

「すまん……。俺が顔を見られたばかりに……」

向井健吾が、情けなさそうにうなだれている。

「マスクを取られていなくても、俺らだってことはすぐに分かるさ」

「しかし、村上の野郎、あの紙切れを見ちまったからな。杉田を襲撃するってこと、もう本人の耳に入っているはずだ」

「ああ、今ごろチャビはボロボロになってるだろう。あの杉田が黙っているはずがない」

商業科の岡田のクラスで、昨日の村上勇一襲撃の経緯を聞いていたところである。勇一への暴行は成功したものの、向井のマスクが剥ぎ取られ、その正体があらわになったのだ。ましてやあの紙切れを村上が持っていたということなど、岡田にとっては寝耳に水だったのである。

「チャビの野郎、みんな喋ってしまうんだろうな」

向井は心配そうな顔をしていた。

「喋ってもおかしくはない。人間、誰だって、暴力は怖いもんさ」

「でも、もしそうになったら、今までの計画もパーじゃないか」「――待て！」

岡田が窓から身を乗り出した。「見てみる、ほら」

そう言って、教室の窓の外に目をやった。向井もその方向を見る。

「あれは……」

「ふん、あいつも頑張ってるじゃないか」

中庭を抜けて、正面の校舎に飛び込む中野光一の姿が見えていた。逃げているということは、すぐ後から追いかけている勇一たちの顔を見れば察しが着く。双方とも必死の形相だ。

「職員室に逃げ込むらしいな」

と、向井が言った。「でも、やばいんじゃないか」

「何がやばいんだ？」

と、岡田が訊いた。

「だから、チャビが……」

「俺たちのことを喋る、と言いたいんだろう」

「もしそうになったら、昨日のことや俺たちの計画だって台無しだ」

「心配するな。あいつは喋らん」

「どうしてそう言えるんだよ」

「よく見てみる」

窓の外を見つめたまま、「喋りたくても、おそらく無理だろう…

…」

と、岡田は言った。

職員室のドアまで、あと数センチ。

このドアを開ければ、今までの苦しみから解放されるだろう。何もかもぶちまけて、この光洋学園の実態を暴露してやる。学校を辞めたっていい。でもその前に、悪い奴らには仕打ちをしなくてはならない。悪は滅びる。いや、誰かが滅ぼさなければならぬのだ。

このドアを開ければ……。

ドアに手がかかる寸前、光一の背中を何かが触った。

誰だよ、邪魔するな！

光一はかまわず手を伸ばす。

しかし、届かない。

そして光一の身体は——職員室とは逆の方向に引きずられていったのだ……。

「——なめた真似しやがって！」

気がつけば、光一は自分の教室の真ん中にうずくまっていた。

「お前のやったことが、どういうことだかわかっているんだろうな」いきなりパンチが——飛んで来なかった。

暴力、いじめ。それは、肉体的に及ぼされるものだとは限らない。こうやって、無言の中の静まり返った教室。光一を囲んだ男たちの静かな息だけが存在する空間は、痛みを通り越した暴力となって光一を圧迫していた。

光一の太ももに、パチンと弾ける小さな痛みが走った。――輪ゴムである。指で絞って皮膚の上で弾かせると、小さいながらも強烈な痛みを与えることができる。

「チャビちゃん。職員室に、恋人でもいるのかな？」

輪ゴムを持った勇一の手が、光一の首に触れる。「キスマーク、付けてあげようか」

指にかかったゴムが、小さな音を響かせてはじけた。小さいながらも――小さいからこそ、人間が感じる痛みというものは敏感に反応するものだ。

「大冒険だぜ、チャビ！ 洋子ちゃんに会いに行っただろう」

？ 木典雄が、わざとらしくからかった。

「哲夫君、どうする、こいつ」

勇一が、無関心を装っている哲夫にわざとらしく言った。

哲夫は、なぜか突然笑い出した。

「どうしたんだよ――哲夫君」

「おかしくてよ」

高笑いさえ始めて、「この本さ。コメディーなんだよ、これ」

と言って、また読み始めた。

「そんなことじゃなくて……。チャビは密告しようとしてたんだぜ」

「何を密告するんだ」

「だから、哲夫君や俺たちがいじめてるってことさ」

「いじめてる？ それはよろしくないね。いじめはダメだよ、君たち」

哲夫は本を閉じて、「チャビ、こっちに来て」

光一には、哲夫の考えていることが分からない。職員室に走ったことや、村上勇一が襲撃されたこと。そして、岡田と密謀を企てて

いることも、哲夫の耳に入っているだろう。

いつもなら敏感に反応して何かしてくるはずだ。しかし哲夫は、怒ったような表情すら見せない。

「はい……」

哲夫に近寄って、光一は歯を食いしばる。

「今日の昼飯」

「――は？」

「今日の昼飯だよ。売店のパンでいいからな」

「でも今日は、ホカ弁の新メニューの発売日ですよ」

数日前から、哲夫が楽しみにしている新商品だ。

「実は、腹が減ってるんだ。今からちょっと行って来てくれないか」
「今から、ですか？」

「授業に遅れたら、トイレに行ってる、って先生に言っとくから、大丈夫だ」

少しためらった光一だが、

「分かりました。じゃ、行ってきます」

と言って、歩き始める。

「ちょっと待て」

哲夫が呼び止めた。「ほら、金」

差し出された千円札を、光一はポケットにねじ込んで、足早に教室から出て行った。

――勇一の頬の傷が、キリキリと痛み出したのだった。

その十三

(九)

職員室の中はひっそりと静まって……。

学年主任の池田憲次は、ただ黙々と書類にペンを走らせていた。定年まで、あと二年。もちろんそれまで働くつもりだったが、人生というもの、どこに落とし穴があるか分からない。

ここ数年、担任になることもなく、担当する数学の授業をするとも少なくなった。

学年の先生をまとめろと言っても、俺は事務職じゃないだ。教壇に立ってこそ、本来の力が発揮されるのではないか。池田はよくそんなことを思っていた。

この職員室にいる教師たちは、誰もが今学期いっぱいでの池田の辞職を知っている。ただ公になっていないから、余計なことは何も言わないのだ。

「池田先生、ちょっといいですか」

そう呼ばれて、池田はペンを止めた。

「どうしたんですか、沢村先生」

「いや、実は……」

沢村は口ごもっている。

「はつきりおっしゃっていいんですよ」

池田は笑顔で言った。「もう聞いていますよね。私、辞めることになりましたね」

「はい、突然の事で、びっくりして……。どうかなされたんですか？」

辞表が出されたとは聞いていたが、やめる理由を思い当たる節がない。家庭は円満だと聞いているし、今から転職……ということも

ないだろう。病気か、とも思うが、最近の健康診断の結果も百点満点だった、と本人が自慢していたではないか。

ただ一つ、沢村は気になることがあった。

「ご自分から辞めようと……」

「今辞めたら、今後の生活が心配ですよ。定年前に辞める人なんて、そうそういないでしょうからね」

「それならば、どうして辞表なんて」

「――はめられた。そう、罠にはまってしまったんですよ」

「罠に？」

沢村の顔が、一瞬曇る。

「この学校の中に、派閥があるのはご存知ですよ」

「もちろん知っています」

「沢村先生も、気をつけた方がいい」

「私も、ですか。それは……」

二人の声は押し殺したように、いや、ほとんど囁き合うような小声になっている。

「商業科の堂村誠次。どうやらPTAとつながりがあるらしい」

「堂村先生……。まさかPTAが、校長に余計なことを言ったとでも」

「その通り。――私がこの学校に赴任してくる前にいた学校で、ちよつと失敗しましてね」

池田は遠くを見るような目で言った。「生徒たちの金を着服した……事になったんです。そんなつもりはなかったんですけどね」

生徒たちから集めた現金。もちろん生徒たちの提案で集められた文化祭のための運営資金だ。展示物を仕入れるために、池田が預かることになったのだが……。

たまたまその日に購入したプライベートな美術品。その費用を、生徒の資金を使い込んだ、と訴えられたのである。

厳格な教師として知られていた池田だが、厳しくなるが故に、反発する生徒がいるのも仕方のないことかもしれない。

しかし、自分の言うことは全く聞かず、生徒の言い分しか聞かなかった学校側。挙句の果ては、自主退職という形にまでされてしまっていたのだ。

「今度は、中学校との癒着だそうです」

「癒着？」

「特定の生徒を優先的に入学させていることになっているようです。面接や入試の判定など、ほとんど私が担当していますからね」

「まさか、そんなことが……」

「全く、笑うしかないでしょう」

そう言いながら、池田は本当に笑い出した。しかし、もちろんその目は笑っていない。

「それで辞表を……」

「出さなかったらいろんな言いがかりをつけられて、クビ、ということになるんですよ」

と、池田は言った。「沢村先生に気をつけてと言ったのは、後任の問題です」

「はい。申し訳ありませんが、私もそのつもりでした」

沢村は、深く頭を垂れた。

順序からいくと、沢村が次の学年主任に任命されてもおかしくはない。もちろん実績だって作ってきたつもりだ。

しかし、だからといって、池田が退職するということの意味を考えると、喜んでばかりはいられないのだ。退職する――ではなく、退職させられてしまう……。

園田洋子の言葉も気になっていた。主任への依頼があったら「辞退してね」という、思ってもみない洋子の言葉だ。

「派閥の一角が、どうやら動き出したようです」

池田は、周りの教職員に悟られないように、それから先は、机の上に置いてあった白紙にペンを走らせた。

たどたどしい指の動き。しかしそれは、沢村にとって思いもかけない文字が連ねられていったのである。

〈次の学年主任 派閥の頭 堂村誠次 操る黒幕 園田洋子〉

そこまで書いた池田は、沢村を見上げて、小さく肯いたのだった……。

放課後になって、職員室の中では何やらざわついて……。

P T Aのお偉いさんたちが、校長室の前でひしめき合っているところだった。

「待ってください！ ちょっと待って！」

教頭があたふたとたじろいでいる。

「校長はどうしたのよ！ どうして出てこないの？」

三角メガネのおばさんが、ここぞとばかりに叫んでいた。

「ですから、もうしばらくお待ち下さい。じきに、じきに戻りますから」

「戻ります戻りますって、さっきから何回言ってるの！」

「ですから、もうじき……」

「いい加減にしてよ！」

三角メガネはいきり立って、「校長はもういいから、池田先生を出しなさい！」

いつの間にか、命令形になっている。

「ちょっと待ってください。校長先生の許可がないと、話も何も……」

教頭としては、直接池田と話をさせても紛糾するばかりだ、と思っていたのである。

入学試験を担当する池田。一部の中学校と癒着しているという噂を聞きつけたP T Aのおばさまたちが、真意を確かめようと押しかけて来っていたのである。

職員室の窓からこの光景を見ていた教職員たちは、それぞれの考えも大きく二分されていた。

教師としての立場、親としての立場、そしてまた、教師といえども組合員としての立場がある。組合というより、派閥と言った方が

いいだろう。

池田の噂の真相ははっきりしていないが、〈上の者〉がそう言っているのだから、間違いはないのだろう。そういった考えが、転勤のない私立高校の教師たちの一部に存在しているのだ。

「ちょっと、池田先生はどこ？」

三角メガネが職員室に乱入した。

「待ってください。ここに入ってもらっては困ります」

教頭が慌てて止めようとしたが……。

「どうしたんですか？ 私のことで、何か」

当の池田が近寄ってきた。そして、「ここでは迷惑がかかります。どうぞ、応接室へ」

と言って、自らその場所へと案内していったのである。

応接室は職員室の真下、一階の玄関口の隣にあった。

「どうぞ、こちらへ」

池田が促そうとしたが、

「どういことだか説明してもらえますか？」

応接室に入るなり、三角メガネが詰め寄って来た。

「ですから、まず座っていただいて……」

そんなに興奮したら、冷静に話だってできないじゃないか。といっても、一度かけられた疑惑は、そう簡単に晴れるものではない。

とにかく座っていただいて……。

事務員が運んで来たお茶を飲んで、三角メガネは冷静に話を……と思っただが、

「もちろん、辞職ですよ。はじめはちゃんとつけていただかないと」

と言って、「ちょっと、お茶、もう一杯くれる？」

まるで女王様気取りだ。

「分かっています。真実がどうであれ、こういう騒ぎになったのは事実です。ただ、もう少し時間を頂きたい。必ず責任は取るつもりです」

「時間なんて必要ないでしょ。今すぐ辞めなさい！」

三角メガネは、興奮のあまり立ち上がって、「そりゃ、きれいな女の先生がいたんじゃ、辞めたくもないでしょうけどね」

と、分かりやすい嫌味を言った。

「——どういふことでしょ」

「女の先生を追っかけ回しているそうじゃないですか」

女の先生？ はて……。

「私の疑惑は、それなんですか？」

「疑惑なんて、いっぱいあるじゃないの」

二杯目のお茶を飲んだ三角メガネは、「園田先生に付きまといっているそうじゃないですか。可愛そうに。まだ独身なのよ、あの人……」

園田先生？ どうして俺が……。あんなガチガチのまじめ女。一緒に飯を食ったって、せっかくのご馳走もまづくなるだけだ。

しかし、どうして今、その名前が……。あくまでも、中学校との癒着が問題となっているのではないか。プライベートの問題なんて関係ないはずだ。もちろん、そんな事実はないのであるが……。

——派閥？ そうか、あいつらの差し金か……。

「今学期をもって、私は辞職させていただきます。しかし、あなたが勘違いされていることがあるように思われます。それを追求するまで、しばらく待ってください」

池田はそう言って、ソファーに腰を下ろしたのだった……。

慌ただしかった職員室の中はようやく落ち着きを取り戻し、個々の先生方はやっと家路に就こうとしていた。

クラブの顧問や課外授業など、職員室を出た後の方向はそれぞれに違っていたが、いつも決まって足踏みをそろえる顔は同じである。自分の問題が最優先していた池田憲次は、誰よりも早く職員室を出たつもりだったが……。

「もうお帰りですか。早いですわね」

聞きたくもなかった園田洋子の声が聞こえた。玄関の横にある事務室から出てきたところだ。

「いろいろ問題がありましたね」

と、池田は言いながら、下駄箱から自分の靴を取り出す。

「PTAですか？ 大変ですね」

ちっとも同情しているような声ではない。

「それだけならいいんですがね……」

「他にも、何か？」

「いやいや、大したことではありません。気になさらずに下さい。

——では」

と言って、靴を履いた池田は歩き出そうとしたが……。

事務室の中からまた一人、書類を抱えて出て来る人影がある。その男は、池田の背中に言葉を投げかけた。

「いいですね、仕事のない人は。私もこんな早い時間に帰ってみたいよ」

池田が振り返ると、商業科の堂村誠次が言いながら、園田洋子に何やら話しかけていた。

この野郎！ お前の仕業ということは分かってるんだ。——派閥の領袖、堂村誠次。これまでもこいつの差し金で、何人もの教職員が辞職や転職に追い込まれていたのだ。

どうせ主任の座を狙っているのだろう。大して給料が上がるわけでもなければ、偉くなるということでもない。その立場に立ってみれば分かるさ。教壇に立つ喜びが、いかに大事だということが……。

池田は何度も大声で叫びたかったが、今は何を言っても無駄だ。

「ここにいらしたんですか。探してたんですよ」

外にいた沢村俊雄が、池田の姿を見つけて玄関に入ってきた。

堂村と洋子が同時に振り向く。池田は外を向いたままだ。

——沢村は、その場の不穏な雰囲気を感じた。

「どうしたんですか、沢村先生。またいじめですか」

洋子と同様、堂村もいじめ問題には直視していないのである。

「そう——いじめになるんでしょうね。困ったものだ」

「何がですか？ 力になりましたか？」

「いえ、結構。いじめる側には、人の痛みなんて分かりませんから。」

——行きましょう」

沢村はそう言って、池田を促した。

——玄関を出る瞬間、沢村と洋子の視線が重なった。いつもの目ではない。

沢村は、何か底知れない不安を覚えたのだった……。

その十四

(十)

〈堂村先生、生徒指導室まで来てください〉

校内放送が鳴り響いた。

それまで沈黙の中、立ち止まっていた教師たちは、やっと現実呼び戻された。

三年生であれば進路指導に使うのだが、一年生を担当している堂村は、進路ではなく生活指導に使うことが多い場所だ。

「何でしょうね、こんなときに」

堂村は舌打ちをしながら言った。「何か問題ごとですか」

「助けを求めているんじゃないですか。誰かにいじめられたとか」と、沢村が言った。

「またいじめですか。いい加減にしてほしいですね。こんな平和な学校なのに」

「まだ分かってないんですか。実際に――」

「やめましょう、沢村先生。いじめは、子供たちに限ったことじゃない」

池田憲次が、そう言って沢村を制した。

「何か勘違いしていませんか。池田先生のこととは――」

と言いつけた堂村だったが、園田洋子が遮るように間に入って来た。

「それより先生、早く行かないと」

「ああ、分かってる。――それじゃ、後で」

沢村にチラリと目をやった堂村は、踵を返して歩き出した。

残った洋子は、自分が置かれた立場をやっと気づいたように俯いていた。

派閥の存在は、この学校の教職員であれば、誰だって知っている。大まかに言えば、成績向上を優先するか、生活態度、個人の自主性を重んずるかという、教育的私見の問題から派生したものだ。

成績向上に重点を置いている派閥の領袖が、堂村誠次。そして、人間としての育成を重んずる派閥のリーダーが、不祥事問題を取り上げられた池田憲次だったのである。

もちろんこれは、それぞれの派閥がもつ基本理念ではあるのだが、分裂したのはそれだけではなかった。

池田と沢村が玄関から出ると、

「沢村先生、ちょっと待ってください」

と、洋子の呼ぶ声が聞こえた。

「池田先生。すみませんが、私……」

「ああ、構いませんよ。僕は先に帰りますから」

と言つて、池田は肯いた。「でも、気をつけた方がいい。大ケガする前に、こっちから手を打たないと」

「分かっています。——もう、気持ちの整理はついていますから」

と池田に言つても、沢村と洋子の関係を知っているわけではない。しかし、公私共に沢村の気持ちを分かっているのは、この池田だけなのである。

池田が行ってしまうと、洋子が出て来て言った。

「どういふことなの？ 池田先生の後任、あなたに決まったそうじゃない」

「そんなの、まだ先の話じゃないか。それに、まだ俺と決まったわけじゃないよ」

とは言ったものの、そんな話を聞いたのは初めてだ。

「だって……私、言つたわよね、辞退して、って」

「それは話が来てからだろう。それに、この有り様だって……」

思わず声が大きくなってきた沢村。しかし、ここは学校だ。「いや、すまん。ここじゃなんだ。君とゆっくり話がしたい」

「話して——今さら話すことなんてないわ」

「八時に、いつもの店で待ってるよ。来てくれないか」
すぐには返事が返ってこない。

しかし、しばらく俯いていた洋子だが、思い直したように顔を上げると、

「分かったわ。必ず行くから、待ってて」

と言って、歩き出したのだった。

——まだ多くの生徒が残っていたのだろう。校門には数人の仲間たちと談笑しながら帰路につく複数の姿があった。

そんな中、腫れた顔を隠しながら、まるで得体の知れない魔物から逃げるように校門を駆け抜ける生徒がいた。

無我夢中なのだろう。目の前の洋子に気づかず、ぶつかる寸前でつまずいて転んだ。

「中野じゃないか。また誰かに……」

沢村が近づこうとしたが、

「危ないだろ！ 気をつけろ、チャビ！」

洋子が一喝した。

「中野、どうしたんだ、その顔は」

沢村が駆け寄って、「誰にやられたんだ。杉田か」

と、抱きかかえながら言った。

「階段で……階段から転んで……。本当です。嘘じゃありません！」
立ち上がった光一は、夢中で散らばったカバンを拾い上げる。

「誰のカバンだ。持たされてるんだろう」

「いえ、ゲームです。ゲームに負けた人が持つことになっているんです」

「いつからだ？」

「いつ、って……。入学したときから——そう、この学校に来てからです」

光一の目が、鋭く光った。「先生、僕には構わないで下さい」

「そんなこと言っても、お前、ゲームに勝った事あるのか」

沢村の声が大きくなる。「勝つことなんかないんだろ！」

「――勝ちます。いつか、必ず勝ちます」

その言葉には、光一の中で沸き立つ執念のようなものが感じられた。

校門を駆け出す光一。沢村はその姿を見守っていた。

「階段から転ぶなんて、全くドジなんだから。運動神経ゼロなんですよね」

洋子がそう呟いた。

「本当に階段から落ちたと思ってののか」

「当たり前でしょ。ゲームだって負けるはずよ。バカなんだから、チャビ」

と言って、洋子は振り向いた。「ねえ、沢村先生――」

「いい加減にしろ!」

沢村の平手が飛んだ。「まだ分らないのか!」

一体、何が起こったのだろう。ここは学校の正門の中じゃないか。

洋子は咄嗟のことに、自分の頬が痺れていることさえ分らない。

数人の生徒たちが、見てはいけないものを見てしまったというような、驚いた表情をしている。生徒の暴力ではなく、教師が暴行を奮っているのだ。

呆然と立ち尽くす洋子を尻目に、沢村は歩き出した。

沢村の姿が見えなくなると、玄関から出てきたのは……。

「どうしたんですか、園田先生」

と、洋子に声をかけたのは、教頭先生。

「私……突然殴られて……。ひどい、ひどいわ!」

洋子はそう言って、大げさに泣き始めたのだった……。

体育館の中にこだまする、ボールが弾む音。

今度の練習試合のため、新しいチームでのフォーメーション作りの真っ最中だ。

「調子、上がってるじゃないか」

「絶好調ですよ、キャプテン。春の大会は優勝ですよ、もちろん」

リバウンドしたボールを奪い取って、岡田浩二は、ゴールに向かって投げた。そして、見事にネットに吸い込まれる。

「何かいいことでもあったのか？」

新キャプテンの近藤弘喜が、タオルを持って近寄った。

「何もありますよ、僕はね」

タオルを受け取った岡田は、汗を拭きながら、「ただ、プライベートでは面白くなってきたのかな」

と言って、足下に転がってきたボールを拾い上げた。

「プライベートねえ……。あまりいい噂は聞いていないぞ」

「何ですか、それ」

投げようとしたボールを持ち直して、岡田は振り向いた。

「今日は来てないだろう」

「――誰がですか？」

「お前のペット」

「ペット？　――もしかして、チャビのことですか」

そういえば、中野光一の姿が見えない。

村上勇一に追われて、職員室に逃げ込んでいるところは目撃した。しかし、目前で捕らわれることは明らかだった。

ということは――もちろん、学校にはいられないほど顔が変形しているはずだ。村上だけではない。杉田が動くはずだ。

果たして、喋ってしまったのだろうか。それで、俺の前に来ることができないのか……。

「キャプテン、どこからそんな話を……」

「俺はこのチームを率いていかなければならないんだ。分かるか」

「それは分かりますが、それとこれとは――」

逆らうわけではないが、岡田はそう言いかけると、

「俺の知り合いにな、チャビのことを知っている奴がいるんだよ」

「そりゃ、学校の中にはいるでしょうね」

「俺の友達は、学校の中だけじゃないぞ」

キャプテンはちよっと笑って、「会わせてやろうか、そいつに」

と言って、岡田を促した。

「でもキャプテン、まだ練習が」

「もう練習は終わりだ。何時だと思ってるんだ」

窓の外は、もう真っ暗。

熱が入っていたのか、時間が経つのも忘れていたようだ。

「ほら、行くぞ」

近藤はそう言って、体育館を出て行った。

その十五（前書き）

更新が遅くなりました。申し訳ありません。

これからしばらくこの作品に専念しますので、気長にお付き合いして下さい。

その十五

部室で着替えを終えた岡田は、近藤に促されて歩き出した。

いつものように自転車で……と思っていたのだが、学校の前にあるバス停にタイミングよく止まったバスに、近藤は飛び乗った。岡田も後に続く。

どこに行くんだろう。話しかけても何も答えてくれない。

繁華街に差し掛かったところで、二人はそのバスから降りた。

「やばいですよ、こんなところ」

飲食店の入り込んだ路地、ではなく、その裏道だ。「どこに行くんですか？」

少し不安な面持ちで、岡田は訊いた。

慣れない場所というものは、人間を不安にさせる独特な空気を感じるものである。

「ほら、そこだ」

そこには、見慣れない工場の廃屋があった。

ギギッと軋むドアを開けて、近藤が先に入って行く。

「先輩、連れてきましたよ」

「おお、やっと来たか。――入れ」

奥の方から声が聞こえた。

やばい！　もしかしたら、ここは……。

「誰もいないんですか？」

「あいつら、今ごろ暴れてるよ。音が聞こえるだろう」
遠くから、エンジンの爆音が聞こえている。

「紹介するよ。中学の先輩で、北村武志さんだ」

近藤が岡田に言った。

北村……そうか。ここは暴走族の集会場で、この男がリーダーの北村。

以前、岡田のグループが、杉田哲夫の身边を調べていたときに、暴走族のリーダーとしてその名前を聞いていた。

まさかキャプテンとつながっているとは……。

「君が光洋学園の岡田君か。バスケット部のレギュラーになったそうだね」

北村は、リーダー専用のパイプ椅子に座っている。煙草をふかしてはいても、暴走族の怖いイメージはない。

「はい、おかげさまで」

「君に会いたかったんだ」

岡田には意外な言葉だった。「どうだい、調べは進んでるのかな？」

「――は？」

「心配しなくていい。何も、君を責めようっていうんじゃない」

と、北村は言って、近藤に視線を送った。

小さく肯いて、近藤が出て行く。

「あのう、僕……」

「杉田の事を調べてるんだろ。チャビをスパイにしてね」

「――それ、チャビが喋ったんですか？」

「あいつは何も言わないよ。そんなことがバレたら、ただじゃすまないってこと、一番知っているだろうからな」

「それじゃ、一体……」

「君にお願いがある。杉田を襲撃する計画、中止してくれないか」
北村は、そう言いながら立ち上がった。そして一歩進み出ると、
「たのむ。今、もめ事を起こしたくないんだ」

殴られるのではないかと思って、岡田は一歩後退していた。

しかし北村は、その場にひざまずいたのだった。

「待ってください！ どうして僕に、そんなことを……」

「俺ももうすぐ十八歳だ。いつまでもこんなことやってられない」

「でも、それとこれとは――」

「俺の後を継ぐのは、杉田だ。そう決めてある。だから、それまで

待ってくれ。それから先はあいつ次第だから、君が何をやってもかまわない。だから、それまで……」

そう言って、北村は頭を下げた。

暴走族のリーダーらしからぬ態度ではあるが……。

「――一つ訊いてもいいですか」

「やめてくれるというのであれば、何でも」

「チャビじゃなければ、誰が漏らしたのか教えてください」

「――どうだ、やめてくれるか」

北村の目が、キラリと光る。

そして、廃屋の陰から、複数の男たちが出て来た。

気がつけば、岡田は取り囲まれていた。

「君の返事次第では、こいつらがどうするか、俺には保障できないが」

北村は、いつの間にか、足を組んでパイプ椅子に座っていた。

よその町から来たのだろう。見かけぬバイクが数台、爆音を鳴らしながら通行人を刺激している。

「何だあいつら、不法侵入じゃないか」

暴走族の暴れん坊、田上信弘が、予想外の闖入者に不満を漏らす。

「やっつけますか」

後部シートに乗っている少年が、鉄パイプを振り回しながら怒鳴り声を上げた。

威嚇するように空エンジンをふかすと、通行人が迷惑そうに顔をしかめている。

その音を聞いて、仲間のバイクが数台田上の周りに集まって来た。

「あのバイク知ってるか？」

田上が訊いた。

「たぶん隣町の奴らだ。俺が行って蹴散らしてくる」

と、金髪少年が答える。

「待て、俺だけで充分だ。お前らそこで見てろ」

そう言って、田上のバイクが走り出した。

まずはゆっくり近づいて……。

「いいか、近寄ったら一気にやれ」

「任せてください。久しぶりの鉄パイプですからね」

後ろの少年が奇声を上げた。

相手は合計三台、六人の少年たちだ。

交差点の真ん中で、周回を繰り返している。車は通行を遮断され、酔った人々も横断歩道を渡ることができない。

田上は、一気に走り寄ろうとした――が。

脇の路地から出て来た改造バイクが、一直線に交差点に入ってきた。

その後部シートの男が木刀を振りかざしている。

「誰だ、あの野郎！」

突然の邪魔者に、田上は一瞬狼狽した。

次々と振り下ろされる木刀。不法侵入の若者たちは、心の準備もできないまま、一方的に打ちのめされていた。

「バカやろう！ さっさと出て行け！」

運転している男が叫んだ。

抵抗する隙さえ与えない。倒れたバイクを起こしている男に、いやというほど木刀を振り下ろす少年。

田上は、近寄ることもできず、その光景を眺めていた。

一目散に逃げていく少年たち。後に残ったバイクには、マスクで顔を覆った男が二人、なにやら話し込んでいる。

田上のそばに、仲間たちが駆け寄って来た。

「誰だよ、あれ。知ってる奴か？」

金髪が、訝しげに訊いた。

「あの野郎……。また邪魔しやがって」

「邪魔って、まさか……」

「杉田だよ、杉田。最近、目立ちすぎじゃないか」

そう言って舌打ちすると、「そろそろケリをつけなきゃいけないようだな」

田上はアクセルグリップを握り直した。

「やめとけ。今やれば、北村さんに迷惑がかかる。そうなたらお前の立場だって危ないんだぞ」

杉田哲夫のことを面白く思っていないのは、何もここにいる田上だけではない。

暴走族というのは団体である。だからといって、常に行動を共にしなければならぬということはない。しかし、突飛なことをすると目立ってしまうのは事実だ。

人様に迷惑をかけるために走っている、という奴もいるだろうが、ほとんどの場合、己の快樂のため、又は、他人に威圧感を与えて、自分の存在を誇示するといった短絡的な若者ばかりなのだ。

そんな中、一匹狼のように息を潜める男がいる。普段はただ、集団行動として走るだけ。しかし、何か問題があると、第一線に出て来る二枚目俳優のような存在だ。

「いつも美味しいところは杉田ばかりじゃないか」

そう言って、田上は路上に唾を吐いた。

「なに、そう長くは続かないさ」

金髪はちよつと笑って、「お荷物、背負い込んだからな」と、言った。

「そうだ、そのお荷物と話ししてみるか」

これは面白い。――と、田上は思った。

目で合図すると、そこにいた数台のバイクが走り出した。

振り向く杉田哲夫。そして後ろに乗っていたお荷物は……。

「また来ましたよ！ やりますか」

「慌てるな、チャビ」

哲夫の声は冷静に、「あれは仲間だ」

と、中野光一を制した。

哲夫のバイクは、ゆっくりと歩道に近寄った。車道の真ん中では

話もできないと思ったからだ。

「頑張ってるじゃないか、チャビ」

哲夫には目もくれず、田上はそう言った。

「いえ……すみません」

「何で謝るんだよ。何か悪いことでもしたのか？」

「つい力が入っちゃって……。あの人たち、怪我したかも——」

「それが申し訳ないって言うのか？」

「だって、木刀だもん、痛いですよ」

光一は俯いた。慣れて来たとはいえ、力加減は全く分かっていないのだ。

「相乗りする人間、選んだ方がいいんじゃないのか」

その言葉に、哲夫はピクリと動いた。

「田上さん、お節介はやめてほしいな」

と言って、哲夫は笑った。「二十歳にもなって、まだやってるほうが笑われるんじゃないの？」

「何だと、この野郎！」

と、田上は詰め寄って、「十代のガキに、何が分かるんだ！」

哲夫に掴み掛かろうとしたが、

「やめろやめろ！ 田上さん、帰ろうぜ。哲夫が言うように、あんたも大人だ。冷静に考えた方がいい」

と言っている金髪だって、自称十八歳なのだ。しかし本当は、田上と同級くらいだろう、と誰もが思っていることも事実だ。

「おい哲夫。お前も自分のこと、もう少し考えた方がいいんじゃないのか」

「どういことですか？」

「心配してやってるんだよ、怪我しないようにね」

田上は光一の顔をまじまじと見てから、「お前、狙われてるんだろう」

と、笑っている。

「俺はいつだって狙われてますよ。——それが？」

「小屋に帰ってみなよ。お客さんが来てるぜ」

工場の廃屋、暴走族のアジトを、「小屋」と呼んでいた。

「客？ 誰だか知らないけど、あまり会いたくないね」

と、哲夫は相手にしたくない様子だ。

「そんなこと言わないで会ってやれよ。チャビちゃんの友達なんだから」

光一の顔から血の気が引いて行く。

まさか自分のことを言われると思っていなかったのだ。

誰だろう。どうして小屋に……。

「チャビの友達か。だったら会ってみるか」

哲夫はそう言って、エンジンをかけた。「行くぞ、チャビ！」

「ちょ……ちょっと待ってください！」

思わず大声になった光一は、「友達なんて、僕にはいません！」

と、哲夫の袖を？む。

「いいから早く乗れ」

有無を言わさぬ哲夫の目。

奴隷として、子分として。――そして、暴走族の仲間として、光一はバイクの後部シートにまたがったのだった……。

ここまで来たら、開き直るしかない。

薄暗い部屋の中で、見るからに凶暴そうなお兄さんたちに囲まれたら、誰だって震え上がってしまうだろう。

しかし、逃げる道はない……。

「それ、杉田が言ったんですか」

岡田は目を逸らさないように言った。

もちろん怖い。いや、それを超える恐怖心は、逆に人間を冷静にするものだろうか。

「あいつはそんな卑怯者じゃない。これは俺からのお願いだ」
と、北村は言った。

「俺がここに来てること、杉田は知ってるんですか？」

「いや、知らないよ。知っていたら、今ごろ君は立っている事さえできないだろう」

「そうでしょうね」

「君だけじゃない。俺もだ」

「と言って、北村は笑った。「あいつはね、狙われてるんだよ」

「だからそれは、俺のことでしょ？」

「そうじゃない。足下からぐらついている」

「足下？」

北村は、自分がいなくなった後のことを考えて、内部の事情を探っていたとき、グループの中に不穏な動きがある事を知ったのだ。何とか食い止めなければならぬ。

もちろん引退したら、俺の知った事じゃない。所詮、烏合の衆である事に違いないのだ。

しかし北村は、どうしても全うしたかった。暴走族に責任も何もあつたものではないが……。

「どうしてもやるか」

北村は念を押すように訊いた。

「やる——と言えますか、俺？ この人たちの前で……」

そう言って、岡田は周囲を見渡した。

「いや、すまん。——おい、お前たち退がれ」

北村の命令は絶対のようだ。すぐさま男たちは消えて行く。

「でも、ここに来た以上、俺の計画は失敗です」

岡田は溜息をついた。「とりあえず、杉田には頑張ってもらえないようですね」

そう言って、岡田は立ち上がった。

「——もしよかったら、君に協力してもらいたい」

出て行こうとした岡田を止めるように、北村は言った。

「何を？ 杉田を殺すんですか？」

わざとらしく言った岡田に、

「まあ、似たようなもんだな」
と言って、奥の小部屋に導いて行ったのだった。……。

バイクのエンジンは切ったものの、中に入る様子は見せない。
ただその場所で、時間が過ぎるのを待つように煙草をふかしているだけだ。

光一にとって、これほど時間を長く感じたことはなかった。

「どうした、落ち着けよ」

足下に捨てた煙草をもみ消しながら、哲夫はそう言った。

「哲夫さん……。俺……」

光一はバイクの周りを行ったり来たり。

「ほら、出て来るぞ」

廃屋の出入り口に目をやると、哲夫はゆっくりとバイクにまたがった。

——ドアが開いて、一人の男が出て来る。

哲夫の動きが止まった。光一も男を見つめている。

出て来た男が振り向いて頭を下げた。もちろん哲夫ではなく、
ドアの中だ。

その顔に浮かんでいる笑み。

戦慄のあまり、動けないのは光一だけか。

岡田は背中を向けて歩き出した。

そして、どうして哲夫が肯いているのか、光一には分からなかった……。

その十六

「だから、理由を訊いているんですよ、理由を」

教頭は、今にも噛み付きそうな勢いだ。

「ですから、悪気はなかったんです。教育的指針の問題です。現実を全く見ていないじゃないですか、あいつら」

沢村も興奮していた。

手を出したのはもちろん悪かったと思っている。しかし、堂村や洋子は現実逃避していると思えない。いじめの問題だって、中野の顔を見れば分かることじゃないか！

「あいつらって……あなた教師でしょう」

「教師だから言ってるんです」

「暴力を振るったんですよ、しかも生徒の前で」

「生徒が暴力を振るっているのは黙認して、教職員たちの問題だけ取り上げるんですか。いじめられた側は、ただ我慢するしかないんですか！」

そう言って、沢村は机を叩きつけた。

「まあまあ、待ちたまえ。もっと冷静になりなさい」

今まで黙っていた校長が、見かねて言葉を発した。

ここは校長室の中だった。

沢村が洋子を殴ったところにいた教頭。そして、生徒たちからも情報が入っている。校長としては、即刻審議しなければならない重要な問題だ。池田の問題でPTAがうるさく騒いでいる真っ最中でもあるのだ。

「沢村先生。理由はどうあれ、暴力はいけません。しかも校内だ」

校長は、冷静——なのだろう。

「申し訳ありません。しかし、校長——」

「実は池田先生の後任、沢村先生に決めていたんですよ。長いこと

頑張ってくれてますからね」

「待ってください。池田先生の処遇、もう決定なんですか」

「そうするしかないでしょう。信用問題ですよ。当校ではね『疑わしきは罰する』というのが昔からの習わしです」

そう言って、校長は机の引き出しから茶封筒を取り出すと、その中から薄っぺらい紙を引き抜いた。

「沢村先生、これを見てください」

教頭が受け取って、沢村の前に差し出した。

「——どういふことでしょう」

「そこに書いてある通りですよ。もっとも、温情的な処置だとは思いますがね」

「私まで、クビですか……」

それを見た沢村は、ただ呆然とするばかり。

「そうと決まったわけではありません。しばらく様子を見るつもりです」

ためらうように、校長は言った。「卒業式までは、頑張ってもらわないとね」

そして、長い沈黙。まるで校長室には誰もいないように……。

「——誰が、何を我慢すればいいんでしょうね」

その声が、校長や教頭に聞こえたのか、沢村には分らなかった……。

暴走族の騒音はいつものことだ。俺だって慣れて来たさ。しかし、高校生が繁華街を歩くということが、こんなにスリルがあるとは……。

悪ぶっているくせに、その世界を全く知らない岡田なのだ。

——三日前のこと。北村の話は、岡田にとって意外なことである事には違いない。

俺にどうしろというのだろう。

杉田哲夫を暴走族から追放する……。

奥の小部屋で二人つきりになった岡田に、それまでとは違った北村の言葉を聞いたのだった。北村の引退と共に、次のリーダーの座を狙っている杉田を失脚させようというものだったのである。

族の仲間たちの手前、自分の後継者として杉田の名前を挙げていたのは事実だ。力も度胸も杉田を上回る奴はいない。統率力も問題ないだろう。

しかし、北村の本音は、本当に後継者にしたい人物がいるというのだ。

「――その男と協力して、俺の引退と同時にやってくれればいい」
北村は小声で、「もちろんやるのは哲夫だ。俺も協力する。そうすればうちも安泰だし、君も本望が遂げられるんじゃないのか」
と言って、岡田の肩を叩いたのだ。

どんな世界でも、実力でのし上がった奴が勝ちなのだ。

エンジンの爆音を遠くに聞きながら、岡田はその小屋のドアをそつと開けた。

誰もいる様子はない。北村が一人で待っているはずなのだが……。
岡田はゆっくりと中に入って行く。

静まり返った廃屋の中に、足音だけが小さく響いている。

奥の部屋に小さな明かりが灯っていた。岡田は近寄って覗き込むと……。

「――遅かったじゃないか」

背後から声がして、一瞬、背筋が伸びた。

「あの……北村さんは……」

振り向くと、見知らぬ男が立っていた。

「お前が、岡田……君かな？」

「ええ、まあ……そうですが」

「北村さんに呼ばれて来たんだよな」

「――北村さん、いないんですか？」

「俺に会いに来たんじゃないのか？」

と、男は言つて、「いや、俺が会いたかったんだ。仲良くしようじゃないか」

岡田の肩に手を伸ばすと、小部屋へと導いて行つた。

この男が、北村が言つていた後継者なのか……。

「あの、あなたが――」

「そう、田上だ。俺もびつくりしたぜ、北村さんがあんなこと言うとはな」

三日前のあの日、深夜遅くに帰つた田上に、北村は言つたのだつた。

「後継者はお前だ」

と。そして、「哲夫をやれ。仲間もいる」

という言葉……。

田上は素直に喜んだ。後継なんてどうだっていい。とにかく杉田哲夫を叩きのめしたかった。

「調べは済んだのか？」

「はい、大まかなことは」

「だったら早い方がいい。――と、その前に、まずは挨拶代わりだ」
そう言つた田上は、ポケットから取り出した煙草を差し出した。

異様な臭いが辺りに漂う。

「お前、やつたことあるか。やつと手に入れたんだ」

断ることもできず、出されたライターの火でくすぶる煙草。

――普通の煙草ではない。

何度か煙草に手を出したところのある岡田だが、こんなに脳髓を刺激させるような煙は初めてだ。

岡田はいつの間にか、体が宙に浮くような錯覚さえ覚えていたのだつた……。

その十七

(十二)

すっかり気分がよくなった岡田は、鼻歌などを歌いながら自分の部屋のベッドに横たわった。

「――普通の煙草じゃないか」

と、田上は言っていたが、ある種のドラッグであることに違いはない。

目が冴えるどころか、体中の血が沸き立つようだ。

――見かけは怖くても、話しをしてみれば結構いい人のような気がする。本気で暴走族のことを心配しているし、リーダーの北村が抜けた後の、人心の細かいところまで配慮している。

こんな俺と、手を組もうとは……。

岡田は、田上の熱弁を思い返していた。

と、枕元の携帯電話から、最近登録したばかりのアニメソングが流れ始めた。

チャビだ……。

「――あのう……もしもし……」

か細い声である。

「遅かったじゃないか。何やってたんだよ」

怒ってはいない。むしろ明るい声で、岡田は言った。

「すみません。なかなか抜けられなくて……」

「今から来られるか？」

「はい、もう大丈夫です。あと三十分もすれば……」

「よし、分かった。後を付けられるんじゃないぞ」

そう釘を刺しておいて、電話を切った。

行動を読まれているチャビだけに、岡田は余計に慎重になってい

るのだ。

まるで恋人が来るのを待っているかのように、岡田は息を弾ませていた。

自転車のベルが鳴った。

岡田は窓を開けて、辺りの様子をうかがってみる。

中野光一が一人でいることを確認して、小さな声で合図をした。

小さく手招きして、肯いている光一を、窓から招き入れた。

「よく出て来られたな。杉田はどうした」

「もう家に帰りました」

「早いな。今ごろみんな、街で騒いでるんじゃないのか」

「そうなんだけど……」

言っているのかどうか、光一は迷った。

——今日は土曜日ということもあって、暴走族は大集合して大暴れしている。哲夫もいつも通り、小屋の隅で待機しているところを、北村武志に声をかけられて街に繰り出して行ったのである。

しかし、パトカーとの追っ駆けっこをしているとき、田上信弘が捕まりそうになったのだ。

裏道に廻ったのはいいが、警察もバカではない。予想外の場所に、覆面が一台、待機していたのである。田上はあっという間に挟み撃ちにされた。

そこに現われたのが、杉田哲夫。無数の爆竹を炸裂させながら、その路地裏にバイクを走らせて来た。光一は哲夫の指示通り、手に持っている小石を投げ飛ばす。一瞬のことに、警察官達は狼狽していた。

「急げ、こっちだ！」

哲夫の声で気を取り直した田上は、警察官の隙を見て窮地から逃れることができたのだった。

小屋に帰った哲夫と光一。

待っていたのは、もちろん……。

「――どうして助けたんだ。お前らしくもない」

と、田上の声。哲夫がいつも座っている場所に立っていた。

「どうして、って、仲間じゃないですか。助けて当然でしょう」

と、哲夫はすましている。

「礼を言わなきゃいけないんだろうな、俺」

「そんなもん、どうだっていいですよ」

「俺はなお前にだけは借りを作りたいくないんだよ」

哲夫を面白く思っていないのは事実だが、こうなってくると立場が悪くなってくる。

「貸したつもりはありませんよ。これは俺の性分でね」

哲夫はそう言う、自分のバイクを磨き始めた。

「――どうだ、これから一緒に走らないか」

と、田上が言う、

「悪いけど、家に帰って勉強しないといけないですよ。来週から試験なんでね」

と言って、哲夫はエンジンをかけた。「チャビ、お前は どうする？」

「僕も一緒に行きます。試験なもんで……」

北村に挨拶をした二人は集団から離れて行ったのだった。

何が試験なもんか！ どうせ俺の襲撃案でも練っているんだろう。

田上はそう考えながら、苦虫を噛み潰していたのだった……。

「哲夫さんは、今ごろ試験勉強しています。この前の成績、クラスで二番だったんです。いつもはトップなのに」

光一はそれだけ言った。

岡田が小屋から出てくるところを目撃した光一に、哲夫は言ったのだ。おそらく自分を狙う田上と一緒にいたんだろう、と。

いつか二人して襲って来るはずだ。そう言いながら笑っていたのだった。

そのことを話していいものか。また、小屋から出てくるところを目撃したことだって……。

「らしくないな。爆音上げて勉強かよ」

岡田は、呆れている、といった様子だ。

「――それより、どうしたんですか？」

「何がだ」

「いえ、ここに呼ばれるなんて久しぶりだし」

「そうだな。――ま、足をくずせよ」

つい正座している光一なのだ。「実はな、いい話があるんだ」

岡田はそう言いながら、不敵な笑みを浮かべた。

光一が足を伸ばそうとすると、

「――仲間ができた」

と、岡田は言った。

「仲間？」

「最強の味方だ。チャビの調査は、間違っていなかったんだよ」

「学校ですか。それとも……」

「杉田のライバルがいるって言ってただろう。そいつだよ」

田上のことを言っているとすぐに分かったが、光一は黙っていた。

「もしかしたら……」

「その通り！ 襲撃の計画も練ってある」

「襲撃、って……やっぱりやるんですか」

と、光一が訊くと、

「来週――。来週の土曜日だ」

岡田はきっぱりと言った。「その日の夜は、リーダーの引退集会があるそうじゃないか。その時にやる」

北村の引退セレモニーに、大通りの大行進と小屋での大宴会が予定してある。

光一もあらかじめ、そのことは聞いていた。

いよいよだ。今までの苦労は報われるのか……。

「チャビ、前祝いだ」

岡田はそう言って、飲み慣れないビールを二つのグラスに注いだ。カチンとグラスが触れ合う鈍い音。

むせながら飲んでいる岡田に対して、光一は口をつけることもできず、震える手にこぼれたビールが流れていた……。

どうして俺までクビなんだ！

俺が何をした？ たったビンタの一発じゃないか。

——もちろん暴力はいけない。それは生徒に対して、口を酸っぱくして言っていることだ。当然、暴力をふるった生徒に対しては、何らかの処分をすることが望ましい。

しかし、ビンタ一発でクビ……。

といっても、今学期いっぱいの様子を見てから、ということだった。いわゆる執行猶予みたいなものだろう。

それでどうなる。春になれば、いじめがなくなるとでもいうのか。どうしていいのか分からない。こんなときは酒でも飲むしか……。

「——バカやろう！ 邪魔なんだよ、どけ！」

よろけた拍子に、ぶつかった数人の若者の誰かがいきなり怒鳴った。

繁華街だけに、双方とも酔っているのだ。

「申し訳ない。つい、よそ見してて——」

と、言い終らないうちに、

「どけって言ってるだろ！」

いきなり拳が飛んで来た。

よろけながら、ゴミ山の中に倒れこむ沢村。

「世の中不景気なのは、こんなオヤジがいるからなんだろうな」

仲間の若者が言った。「懲らしめてやるか」

いつの間にか、沢村は取り囲まれている。

「やめろ……やめてくれ！」

恐怖——ではない。沢村は、腹の底から怒りがこみ上げて来た。「お前ら、いい加減にしろ！」

と、立ち上がって、殴りかからんばかりだ。

集団の輪が縮まって来た。若者たちの目がギラついている。

沢村は拳を固めて振りかざすと——。

「やめないか、君たち。警察が来てるぞ」

と、たまたま通りかかった男が止めに入った。

若者たちが、一瞬ためらう。

「おい、警察だってよ。やめようぜ、バカらしい」

若者たちは、何事もなかったように立ち去って行ったのだった。青くなつて震えている沢村に、止めに入った男が言った。

「どうしたんですか。まだ殴り足りなかったんですかな」

我に返った沢村が振り向くと、

「——堂村先生！」

意外な人物が立っていたのだった……。

「やけ酒なんて、みっともない」

堂村は、無表情な顔で言った。「一般市民に八つ当たりするなんて、教師らしくありませんよ。学校にでも報告されたら、即刻クビだ」

「違います。あいつらの方からぶつかって来て……」

「でも、手を出そうとしていたのは、沢村先生、あなたですよ」

「ちよっと待ってください！ 僕の方が先にやられたんですよ。だから——」

「だから、殴るんですか？」

会話が止まった。

——そりゃ、殴りたかったさ。クビになってもいい。この際、とことん暴れたいくらいなんだよ。

もういい。何を言っても無駄だ……。

沢村は、持っていたセカンドバッグがなくなっていることに気づ

いた。

辺りを探していると、

「これ、あなたでしょ」

と、バッグを差し出す女の声。

「君……」

「よかったわね、無くさなくて」

園田洋子が、そう言って手渡した。

「こんなところで何をしているんだ」

「余計なお世話。プライベートなんだから、あなたには関係ないはずよ」

「待ってたんだぞ。この前だって、何を……」

沢村は詰め寄った。――クビになる原因となったあの日、いつものショットバーで洋子が来るのを待っていたのだ。

「必ず行くから」

という言葉信じて……。

話したかった。すべてを話したかった。主任なんか辞退したっていいさ。俺は第一線で教壇に立てればいいのだから。

しかし、いじめの問題、そして池田先生の進退問題。それに――自分と洋子の関係を絶つということが、沢村にとってつらく思えてさえたのである。

それだけでも、二人で話しを……。

「学校を辞める人と、何を話すっていうの？」

沢村は、洋子を見た。

「――そうか、今度はその男か」

関係ない振りをして立っている堂村を見てから、「いい馬に乗換ええか。大したもんだ……」

と、沢村は言った。

「失礼なこと言わないで。そんな資格、あなたにはないでしょ」
聞いていたのか、堂村が近寄って来た。

そして……堂村の腰に手を回した洋子は、

「私たち、結婚するの。友人代表の挨拶、沢村先生にお願いしようかしら」

と言った。「でも、その頃は、先生じゃないんだ……」

園田洋子と堂村誠次。

二人の目は、いやらしく笑っていたのだった……。

その十八

(十三)

知らなかったのは沢村だけか。いや、池田もその話を聞いてびっくりしていた。

その日は朝から騒然としていて、職員室の中では、二人の結婚話で持ちきりなのだ。

職員会議の中で、教頭から報告があったのである。

もちろんお互い独身なのだから、縁があれば結婚してもおかしくはない。しかし堂村は四十過ぎの男やもめだし、まだ妻を亡くしてそう長くは経っていない。再婚するにしても、まだまだ先のことだと思っていた。

園田洋子とて、いつ嫁に行ってもいいほど、長い間独身生活を続けている。しかし、今まで浮いた話を聞いたことがない。男嫌いだ、いや、あいつはレズだ、なんて噂はよく耳にしていたことでもあった。

素直に祝福する者、他人事だと知らん顔する者また、面従腹背で祝辞を述べる若い先生もいる。

始業のチャイムが鳴って、職員室の出入り口が慌ただしくなった。

「――どう思いますか」

沢村は小声で言った。

「やっぱり……というしかありませんね」

池田が肯く。「しかし、ここまでやるとは……」

全く呆れた、とても言わんばかりだ。

「いずれにしても、厄介なことになりそうですね」

「さあ、授業が始まりますよ。早く行った方がいい」

周りを見回しながら、「また、とんでもない噂が立ちそうだ」

と、池田はため息を漏らしていた……。

職員室の中は閑散として、残っているのは一部授業のない先生や事務職員だけの、咳払いさえためらうような静かな空間が広がっている。

池田は、最後の事務整理をしなくてはならない。

そう、彼の仕事はあと一週間で終わりだ。

机の書類に目を通していると、ゆっくりと足音が近づいて来る。最近までは嫌悪感すら感じていたスリッパの擦れる音。しかし今では、薄汚れた人間模様の姿を見下ろすように、悠然と構えることができるようになっていた。

「池田先生。ちょっとお話が……」

顔を上げると、凍りつくような教頭の顔がそこにあった。

「何でしょうか。引継ぎのことなら、ご心配なさらなくても」

「いえ……実は、ご相談が」

と、ためらいながら、「会議室まで来ていただけませんか」教頭らしからぬ言い方だ。

「分かりました。この書類、片付けてからでもいいですよ」

「ええ、もちろん。――では、待ってますよ」

軽く会釈すると、教頭は足早に出て行った。

――何が相談だ、今さら。どうせ後任の問題か、PTAへの対応のことだろう。

立つ鳥跡を濁さず。そんなこと分かってるさ。

会議室のドアをノックすると、すぐにそのドアは開けられた。

「すみません、忙しいところを」

教頭のこんな言葉は、初めて聞いたような気がする。

「何でしょう、ご相談とは」

「実は……。以前、池田先生は、この学校にいじめがあるといっていましたよね」

「以前ではなく、現在もあります」

「その話、聞かせてもらえませんか」

「どうしたんですか。何か問題が？」

二人はとにかく座ることにした。

「大変な情報が入りましてね……」

しばらく声を失っていた教頭は、「近く、乱闘があるらしいんです。ある生徒から、私にところに電話があつて……」

「乱闘？」

意外な言葉に、池田が身を乗り出す。

「普通科の一年に、杉田哲夫という生徒がいますよね。その杉田を襲撃するというのは？」

「——誰がですか？」

「それが、同じクラスの中野光一のグループらしいのですが……」
グループ？ 光一の話は沢村から聞いていたが、あの子は単独でいじめられていたはずだ。

仲間がいるとすれば、それは……。

「中野は、誰と襲撃するっていうのですか」

「ええと、村上勇一、？ 木典雄、それと……」

杉田の仲間だ。そんなことはありえない。

おそらく偽の情報だろう、と池田は思ったが、

「誰から電話があつたんですか？」

それ次第では、堂村新主任を押さえつけてでも動かなければならない。

「それは——」

池田の目が、キラリと光った。

——あと一週間。それまでは、俺は学年主任なんだ。

早く授業が終わってくれ。そして沢村と話をしなければならぬ。池田は自分でも分からないうちに立ち上がっていた……。

机の上にばらまかれたゴミ。明らかに誰かの仕業に違いない。信じられないような光景は、体育の授業から帰って来た男たちを

立ち止まらせた。

ゆつくりと自分の机に近寄る。——こんな有り様を見るのは、入学以来、初めてだ。

きつと怒り出して、暴れるんじゃないか——と、誰しも思ったが……。

「何だこれ！ 誰だよ、こんなことしたの」

そう言って、慌てて掃除し始める中野光一。

「いいよ、構うな。俺の机だ」

分かっていたこと、とでも言うように、哲夫の顔は変わらない。

「いいです、僕がやります。座っててください」

雑巾を持って来て、光一は散らばった弁当の残りかすをかき集めた。

「でも、本当に誰なんだろう」

「俺を面白く思っていない奴さ。例えば、岡田とか？」

「まさか、授業中に……」

「ああ、そんなことはないだろう。たぶん、身近にいるんじゃないのかな」

哲夫はそう言って、呆然と見ている村上勇一に目をやった。

「哲夫君、まさか、俺がやったと……」

勇一が進み出て来る。

「お前、途中、抜けてただろ。どこに行ってた」

「しょんべんだよ、小便。俺がやるわけないだろ」

「そうか。だったらいい」

「何で俺が疑われるんだ。チャビ！ お前だろう。いじめられている腹いせに、こんな汚いまねしたんじゃないのか」

勇一が、光一に？みかかった。

「僕じゃありません！ そんなことできるわけが——」

言い終わらないうちに、光一は蹴り倒された。

哲夫に疑われたのがよほど悔しいのか、勇一は再び拳を振り上げる。うっぶん晴らしは、光一にしかできないのである。

光一の顔面に向かっていた拳、いや、手首を哲夫に？まれた。

「やめろ。こいつに手を出すな」

勇一の身体が引き戻された。

「どうしてだよ。何でチャビを庇うんだよ。こいつはみんなのペツトじゃないか！」

「うるさい！ いい加減にしろ！」

哲夫は大声で怒鳴った。「勇一、お前が掃除しろ」

「何で俺なんだよ。チャビにやらせればいいじゃないか」

「チャビはな、友達なんだよ」

哲夫はそう言った。「やっと友達になったんだ……」

光一を抱え起こす哲夫。

勇一はふてくされながら、哲夫の机を磨いていたのだった……。

「楽しみだよな今度の土曜日」

バイクを運転しながら哲夫が言った。

後ろに乗っている光一は、返事のしようもない。

哲夫が言っているのは、リーダーの引退集会のことだろう。派手に暴れまくって、気持ちよく送ってあげる。はれて暴走族を卒業するのだ。

しかしその後、哲夫は自分が襲撃されるとは思っていないだろう。そのステージを作っているのは、哲夫の腰に手を回した、光一自信なのだ。

「哲夫さん、僕……」

「あ、それから、今日の机のことなんだけど」

光一の言葉など聞いていないように、「あれ、誰だと思う」
哲夫の口調は、いかにも楽しげだ。

「――僕だと思っているでしょう。他にいませんよね」

「あれはな――俺なんだよ」

そう言って、哲夫は笑った。

今、何と言ったんだ？ 自分で？

「でも、どうしてそんなことを……」

「ちよつとな。探ってみたかったんだ。最近、俺の周り、おかしいだろ」

いつの間にか、工場の廃屋、「小屋」に着いていた。

エンジンを切ってバイクから降りた哲夫は、ドアを開ける前に言葉が続けた。

「岡田はもちろんのこと、族の田上やその仲間、それに、勇一や典雄だって何を考えているのか分からない。最近あいつらに冷たく当たってるからな」

と言った哲夫は、しばらく黙ったまま言葉を探しているようだった。

「――なあ、チャビ。正直に言おうか」

思い切ったように、哲夫は顔を上げた。

「何を――ですか？」

「実は俺、怖いんだよ。いつかやられるときが来るだろう。威張ってばかりいるし、俺に反感買ってる奴だっていることぐらい知ってるよ」

「そんなこと、僕には……」

「お前が一番知っているはずだ。分かっているんだよ」

光一は何も言わなかった。ただ黙って見つめるだけで。

しかし光一は、なぜか怖くなかった。岡田との陰謀や田上の計略。それに加担していることだって知っているはずだ。そう、哲夫は分かっている。分かっているのだ。

僕を問い詰めればいいのに。今哲夫に詰問され、殴る蹴るの暴行を加えられたら――いや、その寸前にだってしゃべってしまいたい。そうなのだ。

――殴られたい、蹴られたい。そして馬乗りになって、僕のことを罵ってほしい。もちろんマゾヒスト的な欲望ではなく、それが長いトンネルから抜け出すきっかけになるような気がしたのだった……

…。

「ビビるんじゃないぞ」

そう言って、哲夫はドアを開けた。「やる時も、やられるときも、自分のプライドを崩すんじゃない。お前も一人前の男になったんだからな……」

小屋の中に入って行く哲夫。

——光一はしばらく、その姿を見つめていたのだった……。

「ですから、教頭が認めたんですよ」

電話の向こうで、池田が叫ぶように言った。

「でも、いじめられているのは中野の方なんですよ。まさかそんなことが……」

休み時間や放課後に話をしようと思っていたのだが、会議や来客のため、そのタイミングを失っていたのである。

何度電話しても不在だった沢村を、やっと深夜になって捕まえることができたのだった。

「しかし、杉田が襲撃されることは間違いないらしい」

「いつなんですか？ どうしてそれが分かったんですか？」

「今週の土曜日。教頭先生のところに、ある生徒から電話があったそうなんです。名前は言わなかったらしいんですが、中野と商業科の岡田が共謀して——」

池田は一気に話そうとしたが、「——もしもし、沢村先生？」

「ああ、すみません。ちゃんと聞いてます」

沢村の頭の中に、腫れた顔で泣きじゃくっている中野光一の姿が甦っていた。

そういえば、以前中野の家を訪れたとき、近くで岡田と会ったことがあった。岡田の力を借りて復讐するともいうのか。

しかし、どうして中野が……。

「商業科の生徒にも、バスケット部の生徒にも訊いたそうです。――

「白状した生徒がいたんですよ」

「それで、なぜ中野が悪くなるんですか」

「それは、暴行事件を起こそうとしている人物ですから、未然に防がなければいけないということでしょう。今なら父兄召還で済むかもしれません」

「親を呼んで、何を言うんですか。あいつはいじめられて来たことに対する復讐をしようとしているんですよ。それをやめさせたって、今までのいじめが続くだけじゃないですか」

もしその襲撃の話が杉田の耳に入っていたとしたら、単なるいじめだけでは済まされないはずだ。

「沢村先生は、中野の襲撃を容認するというのですか」

「そうじゃありません！ 中野がそこまでするきっかけとなつたいじめをなくすのが、我々教師の役割じゃないんですか」

沢村の声が、一段と大きくなった。真夜中だというのに、妻子が起きるどころか、近所にだって聞こえてるかもしれない。

池田はそんな心配のせいか、返す言葉をなくしていた。

——杉田の仲間だった村上勇一と？木典雄。それに中野光一が所属するバスケット部の岡田が絡んでいるいう。すべて光一をいじめていた主要人物ばかりだ。そいつらが杉田を襲撃する？

そうなれば、杉田は学校の生徒全体を敵に回すことになるだろう。しかしそんなことは考えられない。主導権を握っていた杉田に、簡単に謀反の謀議が成り立つとは考えられない。

光一をいじめていたのは杉田であり、そのグループの村上や？木だ。

「この話には何か裏があります。いじめだけではない、生徒たちの、いや、人間の感情が絡んで……」

沢村は自分でも何を言っているのか分からなかった。

「明日、もう一度確認しましょう」

池田は力強く言った。「もちろん、いじめの問題から——ですよ」
どうせこの学校は辞めるんだ。立つ鳥跡を濁さず？ わかつてる

よ。

だから、きれいにしなければいけないんだ。

「池田先生。どうせ僕も辞めるんですから、学校のために何か残しますよ。学校の、子供たちの将来のために」

そう言った沢村の声は、教壇で情熱の限りを尽くして授業に取り組むときのような、熱い響きがあった……。

その十九

(十四)

「チャビ、ちょっと待てよ」

授業が終わって、バスケットの部室に向かっていた光一は、校舎を出たところで呼び止められた。

「はい、何か……」

振り向けば、そこにいるのは村上勇一と？木典雄。

「まだ飯食ってないだろう。一緒に食わねえか」

勇一の言葉を補足するように、

「学食でいいじゃないか。最近行ってなかったしな」

と、典雄が言った。「何時からなんだよ、バスケ」

「二時からなんだけど……僕、先に行って準備しないといけないし……」

「いいじゃないか。いつまでもパシリやってんじゃねえよ」

と、典雄。

「ちよっと話があるんだ。――何、お前をいじめようってわけじゃないさ」

二人の態度は、今までのそれとは明らかに違っていた。

何となく――そう、何となく三人は学食に入っていたように見えていた。

――土曜日の学食は、一部の生徒しか利用しない閑散とした場所だ。

カレーライスを注文した三人は、誰もいないのに、一番隅のテーブルに座った。

よほど腹が減っているのか、猛烈に食べる典雄。ちよっと口にし

ただけで、視線を逸らして何か考え込んでいる勇一。

光一は、二人のことを気にしながら——ということもなく、米の一粒一粒、ニンジンやじゃが芋に比べて肉が少ない、ちよっと甘口だ、などと考えながら、ゆっくりと空腹を満たしていた。

勇一は何を言いたいのだろう。訊かれてもおかしくないことは山ほどある。それに対する答えだって——いや、答えなんかあるはずがない。

何をどうすればいいのか、一番分らないのは光一なのだから……。

しかし、何か底知れない落ち着きが光一にはあった。

窓に目をやると、学食の外を杉田哲夫が横切っている。口に運んでいた光一のスプーンが止まった。

哲夫がこつちを見た。光一と視線が重なる。そして——そつと片目を閉じて、何事もなかったように、哲夫は通り過ぎて行った。

「なあ、チャビ。お前、知ってるだろ」

勇一が、やつと口を開いた。

「何をですか？」

「やるんだろう。岡田と協力して、哲夫君を襲撃。——情報は入ってるんだ」

あちこちにいろんな情報が飛び交っている。少々のことでは驚かなくなっではいたが、

「知りません、そんなこと。僕、まだ死にたくありませんからね」

「沢村に呼ばれたんだ。俺と典雄と岡田。それに、チャビも一緒にあって哲夫君を襲撃するんだって？」

勇一はそう言って光一を見据えた。

「へえ……それも面白いかもしれませんね」

「——チャビ。それ、本気でやってみる気はないか」

何？ 襲撃に勇一が加担する？

勇一は最近、哲夫に疎んじられている。それは確かに分かっていた。

しかしここまで思いつめているとは……。

「情報によれば、決行するのは今日だ。バスケット終わるまで待つてろぞ。明日の朝まで、仲良くしようじゃないか」

どうやら勇一は本気らしい。典雄は横で水をがぶ飲みしていたが、その目は勇一に同調している。

光一は、残っていたカレーライスを一気に詰め込んだ。

――足りない。これくらいじゃ、夜中まで持たないかもしれない。「すんません！ カレー、おかわり！」

と言った光一の大きな声に、テーブルを片付けていた学食のおばちゃんは、びっくりしてアルミの皿を落としてしまった。

ガラランガラ、カラカラ……。

――足下に転がってきた皿を、光一は蹴りつけていた。

(十四)

自分が望んでいることなのか？

本当にそれでいいのか？

バスケットの部室の隅で、メンバーのユニフォームにアイロンをかけながら、中野光一は自問自答を繰り返していた。

いじめの限りを尽くした高校生活。僕の本当の顔を知っている奴がいるだろうか。いつも腫れ上がっているし、シミのような黒いアザは生まれつきなんかじゃないんだぞ。見れば分かるだろう。右だった左だったり、殴打されるごとに移動しているじゃないか。

やられた分はやり返す。それでいいだろう。今まで我慢してきたんだ。

だから……だから復讐して……。

バスケットの練習が終わったら、工場の廃屋、あの「小屋」で杉田哲夫が待っている。土曜日の今日、いつもの集会ではなく、リーダー北村武志の引退式が盛大に行われる。そして酒やドラッグがあ

の連中の頭を麻痺させるはずだ。

解散した後の帰り道、光一が上手に誘い出す。待っているのはもちろん、岡田と一部の仲間。そして暴走族の無法者、田上信弘が挟み撃ちにすることになっている。

哲夫はおそらく、まともな身体では帰れないはずだ。いや、それどころか「殺してコンクリートに……」という声さえ田上の周りで聞こえていたらしい。

しかし、ここまで来て邪魔者が入って来た。村上勇一と？木典雄だ。

「――どうだ、俺たちも仲間に入れてくれないか」

二杯目のカレーライスを食べているとき、村上勇一が言ったのだった。

「待ってください。誤解ですよ」

「誤解？ それでもいいじゃないか。実際、やろうと思ってるんだろ」

否定すればいいものの、光一は答えることができない。

「とにかく、今日、待ってるぞ。作戦会議だ」

？木典雄もその気らしい。

光一の肩をポンと叩いて、勇一と典雄は三人分の料金を払って出て行ったのだった。

――どうしよう。哲夫に気づかれないようにするだけでも大変なのに、あの二人がついて来たのではどうすることもできない。

光一は考えながら、床に落ちているボールを見つめていたのだったが……。

「何やってんだ！」

突然ドアが開いて、キャプテンが飛び込んで来た。

「あの……ユニフォームにアイロンを」

「バカやろう！」

怒鳴りながら、キャプテンがアイロンを取り上げる。

黒く焦げ目のついたユニフォームから、薄紫の煙が静かに流れて

いた。

今まで我慢していたうつぶんを晴らすように、沢村は奇声を上げていた。

「だから言っていたはずです。何かあったでしょう。気づかないはずはない」

今日、沢村のクラスで授業を行った教師が数人、職員室の隅に集まっている。

沢村と池田の呼びかけに応じたものだった。

「さあ……私の時には分かりませんでしたね」

英語の担当教師が言った。

「いじめ、襲撃。あんなあどけない子供たちに、そんなことが……」
物理の教師も態度が曖昧だ。

「いや、それもそうでしょう。ただ、学校の中で、とは限らない」
池田は同調しながらも、「授業中はおとなしくても、放課後、いや、夜になってからが怖い。おそらく人目につかないようにするでしょうからね」

と言って、ずれたメガネを何度も直した。熱中しているときの癖なのである。

「でも、当事者が休んでたら、うつぶんも何もあったもんじゃないでしょう。ばからしい」

相変わらず、園田洋子は関心を示さないような態度だ。

しかし、洋子の言うことがまんざら外れているわけではない。

杉田哲夫が欠席していたのである。襲撃を知っているからか、または昨日のうち、いや、朝からだってあり得るのだ。もし病気であるとしたら、家から連絡があるはずだ。

しかし、杉田の家に電話しても、誰もいないのか、呼び出し音が鳴り続けるだけだった。

「村上はどうでした？ 向井は？」

と言った沢村は、「それから、岡田浩二に変わったことはなかったですか？」

そっぽを向いたままの堂村の前に立ちはだかった。

顔を上げた堂村。しかしその目は、沢村を見ていない。

「杉田が休んでいるのなら、何も問題はない。それより、池田先生の送別会はやらないんですか？」

わざと話を逸らすような言い方だ。「やるんだったら早く言ってください。私も予定があるんでね」

これには沢村も憤慨した。が、何を言っても無駄だろう。

たとえ送別会をやるにしても、こんな奴に來てもらわなくてもいい。というより、出席してもらうつもりなど毛頭ないのである。

確かに池田は今日で終わりだ。いや、正確にいうと、明日の日曜日までが光洋学園の教師として籍が残っていることになる。

まだ土曜日だ。今は現役の教師として、最後まで任務を全うしなければならぬ。

それは沢村が思う以上に、池田の行動や発言、そしてその目が、何よりも物語っていた。

「中野はどうしていましたか？」

池田が訊いた。

「これといって変わりはありません。しかし、妙に落ち着いているんです。おどおどしてないし、どこか一点を見つめる目が鋭く光っているような気がするんです」

沢村は今日一日、中野光一の姿を追い続けていた。

「チャビもたくましくなったじゃないの。良かったわね」

どうでもいい、というような洋子の声は聞いていない。

「それが怖い……」

沢村の言葉を聞いて、池田は立ち上がった。

「行きましょう、沢村先生」

「行くなって、どこから行けばいいのか……」

「まずは体育館。バスケットの練習場ですよ」

そうだ。一番の中心人物は中野光一なのだ。

沢村と池田は、周りの冷たい目を気にすることもなく、職員室を出ようとして――トレーニングウエアの男とすれ違った。

「ちよつと……。今は練習中じゃないのかな？」

男はバスケット部のコーチである。

「今日は急遽中止になりました。何でも、トレーニングを兼ねた山登りだと言って、全員出て行きましたよ」

「出て行った？」

「突然キャプテンが言い出しましてね」

「それで、帰って来るんですか、ここに」

池田の声が高まった。

「そのまま解散だそうです。本当に頼もしいキャプテンで、これくらいが楽しみだ」

コーチはそう言って、職員室の中に消えて行く。

廊下に残った二人は、ただ呆然と立ち尽くしていた……。

その二十

(十五)

こんなこと聞いていないぞ。山登りなんて、バスケットに必要なのか？

山といっても、町外れにある小高い丘のようなものだ。

スポーツマンは走る事に慣れているかもしれないが、村上勇一と？木典雄にとって、坂道を自転車で走るということは、今までにない大変な運動量なのである。

山の中腹まで（といっても、ほんの少しの距離だが）行くと、そこから山頂までの石段がある。上り口の広場に集まったバスケット部員たちは、キャプテンの号令の下、一気に駆け上がり始めた。

「こんなこと、いつもやってんのか？」

息を切らしながら木陰に自転車を止めた勇一は、バスケット部の連中に気づかれないように、典雄を林の中へと引き込んだ。

「そんなこと知らねえよ。でも、学校の中よりは却ってよかったんじゃないかな」

典雄も肩で息をしている。

「とにかく、チャビが降りてくるのを待つしかなさそうだな」

「ああ。しかし、覚悟はできてるんだろうな」

と、典雄は山頂を見上げながら言った。

「もちろんさ。今まで我慢して来たんだから」

勇一が言っている言葉は、典雄としても共感していることでもあった。

——日頃から二人で話しをしていたことだった。

高校に入学して間もない頃は、学力とは別に、腕力や悪力（不良組織を繋ぐ握力とも）が大事である。ボスを決めるためのトーナメ

ント式のケンカが、夏休みに入るまで陰々と繰り広げられていく。身近なクラスメートから始まって、隣のクラス、そのまた隣。そして他の科へと広がって、学年での強弱が決まっていくなのである。

一対一のケンカに負けることのない杉田哲夫。しかし集団をまとめるリーダーの資質があったかといえ、それとはまた違う。ただ力で押さえつけられ、仲間外れにされるのを恐れた勇一や典雄らの集合体が、哲夫をトップに押し上げていたのかもしれない。

心の中では、面白くない、楽しめない、氣を使いたくない。何をするにしても、哲夫の顔色をうかがっていないなければならないのだ。

威張ってんじゃねえよ！

沸々と煮えたぎるその気持ちを、今ここに晴らすことができるのだ。

「――おい、下りて来たぞ！」

典雄が見上げると、息を詰まらせながらもテンポのいい足音が近づいて来た。

広場に集まるバスケット部員。

勇一と典雄の視線は、まだ見えない光一の姿を、遠い山頂へと向けていた。

最後尾から追いかけるように走っていた光一は、中腹辺りで立ち止まることになった。先頭を走っていたキャプテンが、石段に腰を下ろしていたのである。

通り過ぎていいものか、ためらいながら速度を落とす光一に、

「チャビ、ちょっと……」

待っていた、と言わんばかりに、キャプテンがその名を呼んだ。

「はい」

「まあ、横に座れ」

逆らう理由もなく、光一は腰を下ろした。

「キャプテン、みんなが下で――」

「待つてると思うか？ そんな奴がいたら、夜のパーティーを楽しみにしているバカな野郎どもくらいだろう」

キャプテンは石段から目を離して、「――行くのか？」

と、光一の顔を見て言った。

即答できず、光一は黙ってうつむいている。

キャプテンが北村とつながっていることは、岡田から聞いていたことでもある。今日の引退式だって知っているはずだ。うかつにものは言えない。

「今日、ここに来たのはな、お前を守りたかったからなんだよ」

「僕を……守る？」

「いろいろ動きがあるようだな。北村さんがぼやいてたよ」

真冬の山の風は冷たい。木々は枯れ果て、麓から吹き上げる冷気は、光一の上気した体を十分に冷やしているようでもある。

キャプテンの言葉は柔らしくもあり、優しさを感じるものでもあった。しかし光一には、自分の身体を温める言葉、心をほぐす話にはなっていないかった。

「――今日の目的を言ってみろ」

と、キャプテンが訊いた。

「北村さんの引退――」

「その後だ。――本当にやるのか？」

「あの……」

「もしやるんだとしたら、邪魔するつもりはない。もちろん北村さんだって同じだ」

「ちょっと待つてください！ その話――」

「杉田はおそらく知らないから心配することはない。それもあいつの運命だからな」

と、キャプテンは言って、「しかし、やめるなら今だ。後のことを考えてみろ。お前は担ぎ出されているだけなんだぞ。学校の中も暴走族の中も、いつか分裂してしまう。そして次にのし上がってくる奴は、誰かを犠牲にしなくてはいいけないんだよ」

そこまで言うのと、キャプテンは身体の向きを変えて、光一を正面から見て、

「それがお前だ」

と、言った。

次にのし上がってくる奴……。

今まで台頭していたのは誰だろう。

そんなことは考えるまでもなく、杉田哲夫であり、暴走族では北村武志。

そして哲夫に対抗しているのは、岡田でもあるし、族の田上だろう。後は哲夫をよく思っていない岡田の連れだったり、田上を慕う一部の少年たちだ。

——しばらく、光一にとって息苦しい沈黙が続いた。

「キャプテン、どうして知っているんですか？」

「何を、だ。俺は何も知らないよ」

「だって……」

知ってるから言ってるんじゃないか。誰に聞いたのか、それだけでも教えてもらいたい。そうでないと、今日の計画は実行前から失敗することになる。

「知らないことにした方がいいんだろう。だからお前も聞かなかったことにしろ。別に邪魔するつもりはない」

キャプテンはそう言って、「学校の中も今は物騒だ。——誰かが密告したらしい」

「密告？」

「教員たちがうろうろしてるから、うまくお前を連れ出したかったんだよ。よかったじゃないか、学校から出られたんだから」

先生たちまで……。しかし教師の耳に入るとしたら、光一がいじめられている、ということだろう。

だったら俺は被害者のままで、庇ってもらえるというのか。

「——今日の練習はこれで終わりだ」

と、キャプテンは立ち上がった。

「待ってください！ 僕……どうすればいいのか……」

光一もすがりつくように立ち上がった。

「お前の好きなようにしろ。ただし、あくまでも自分の意思で行動するんだ。分かったか。自分の意思で、だぞ」

そう言うのと、軽快な足取りで石段を駆け下りていくキャプテン。

光一は動揺していた。

もう遅い。船は出てしまったんだから……。

一人になった光一は、ゆっくりと石段を下りて行く。

——勇一と典雄が、待ってましたと言わんばかりに立っている。

光一は微笑みながら、二人に近づいて行った。

どうしたんだろう。立場が逆転したようだ。

いつの間にか、光一は先頭を歩いていたのだった。

「長い間、お疲れ様でした」

事務の女の子が、大きな花束を抱えて池田の前に歩み出た。

職員室の中に、長年の労をねぎらう拍手が鳴り響いた。

「ありがとう。こんな形で辞めていくのは誠に残念ですが、思いを残したままこの場を去ります」

池田は周囲を見回して、「今までありがとうございました。後は……後は皆さんにお任せしたい。この学校を、この学校の本質を見直してください。子供たちの姿を、もう一度見直してほしい。それは学校のためもあり、子供たちのためです」

と、力説するように言葉を発した。

深く頭を垂れると、最後に残った荷物、黒い擦り切れたカバンを持って、様々な意味が込められた拍手のカーテンを潜って職員室を後にしたのだった。

結局、何も解明されないまま池田は辞めてしまうのか。

今日で——いや、正確に言えば明日までであるが——光洋学園高校を退職する池田に、放課後の職員室で、ささやかな送別会が開か

れていたのである。

正直というか冷淡というか、池田の姿が見えなくなると、何事もなかったように職員室の中は静まり返った。クラブの指導へ行く先生、書類を整理する先生、また、あっさりと帰ってしまう先生も少なくない。

沢村が追いかけるように飛び出すと、池田はちょうど自分の車に乗り込むところだった。

「池田先生、待ってください！」

駆け寄った沢村は、閉まりかけたドアを掴んだ。

「こっちじゃありませんよ。助手席に乗ってください」

池田が助手席のロックを外す。

今日、学校を辞めていくはずの池田の目が、まるで新任教師が初めて授業に挑むときのよう、鋭く輝いている。

「中野の行方、分かりましたか？」

車に乗り込んだ沢村に、池田が訊いた。

「たぶん、山の走り込みに行ってるんじゃないかということです」

「行きましょう。早くしないと、間に合わないかもしれない」

といい終わらないうちに、車は走りだしていた。

結局、学校では何も起こらなかった。それはそれでよかったのかもしれないが、襲撃の密告はがセネタとは思えない。今まで懸念していたいじめ問題が、やっと顔を出そうとしているのだ。

授業がない池田は、朝から情報の収集に奔走していたのだった。

車は町を抜け、その山の麓まで来ていた。

「ここだ。この石段を上っているはずだ」

池田はそう言って肯いた。

「誰もいませんね。もう、帰ったんでしょうか」

と、沢村が車から降りようとするのと、

「沢村先生、あれは……」

石段を下りて来る二人の人影が見えた。

「村上と高木じゃないか……。やっぱりそうか」

急いで飛び出した沢村は、「おい、待て！」

と、声をかけた。

ぎよっとする二人。意外な人物と出会ったとき、人間の体というもの、自分の命令に従わないものだ。

哑然として立ち止った二人に、

「中野を知らないか。ここでトレーニングをしてると思ったんだがいつもと変わらぬように、沢村は笑顔で訊いたのだが……。」

「先生、大変ですチャビが——チャビが殺されるかもしれません！」
村上勇一がうろたえながら言った。それを見た典雄も、取ってつけたように追隨してくる。

「どうした。何があったんだ」

「哲夫君が、チャビを殺す計画をたててる、って……」

「杉田が？——いつだ。どこでだ！」

「工場です。暴走族のたまり場になってる、街中の廃屋で……」

そう言って、勇一は沢村にしがみついた。

沢村は詳細を訊いた。

たまたまここに来ると、バスケ部の連中が騒いでいたという。その中で、光一が哲夫の襲撃から守ってほしい、と岡田に嘆願しているのを目撃したというのだ。

すべてを聞いた沢村は、地平線に沈んで行く太陽を見ていた。

何かが起こる。明日の太陽が昇る前に、大きな事件が起きることを、沢村は本能的に感じていたのだった……。

気まずい雰囲気だった。

それもそのはず、校長室に呼ばれるということは、生徒だけではなく、教師にしたってあまり気持ちのいいものではない。

ただ静かに書類に目を通している校長の前で、堂村と園田洋子は、校長の次の言葉を待つしかなかった。

どうして呼ばれたのか、何となく分かっていた。池田が解任され

ることは、P T Aと教員たちで決めたことだ。しかし池田の不祥事ははっきりしたものではない。あくまで噂だけのものだ。ただ、調査委員と称して池田を窮地に追い込んだのは、事実上この二人だったのだ。

もちろん不審に思っている先生もいて、真意を明らかにしてほしい、と校長宛に嘆願書が提出されていたのである。そこにいじめの問題が露呈して、校長自ら動き出していたのである。

「――だから、いじめがあった、というわけですね」

校長は書類から目を離さないままで言った。

「あるかもしれない、ということです。ただ、それを隠している先生もいるんじゃないかと思って……」

と、園田洋子。

「それが、池田先生だというんですか？」

「そうです」

堂村が横から口を出す。「それに、沢村先生もおかしい。発覚したら、監督責任で自分の立場が危うくなりますからね。かなり前から分かっていたことを、今まで隠していたようなんです」

しばらくの沈黙があつてから、校長が顔を上げた。

「――分かりました。一刻も早く調査してください」

「もし、何か問題ごとでも起きたら……」

と、洋子は言いよどんだ。

「その時は、担当教師に責任を取ってもらう。それでいいでしょう」
校長はそう言って肯くと、さっさと出て行ってしまったのだった。
堂村と洋子の目が合った。

何も言葉はない。いや、何も言う必要もないだろう。

――校長室を出た堂村に、一人の男子生徒が頭を下げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8122q/>

チャビ！

2011年10月8日03時25分発行